各務原市内寺院簿

（その四）

まえがき

十年以上にわたる寺院調査も、やっと終焉の時を迎えようとしている。思えば、我々「各務原市歴史サークル」が、故小林義徳氏の指導のもとで端緒についたのが平成元年八月のことであった。記念すべき最初の訪問先は下中屋の「西入坊」であったのだが、以来すでに十年という歳月が経過し、市内にある寺院のほとんどを調査し終えたことになる。その間には筆舌に尽くしがたい程の蹉跌を幾度となく味わったことか……、サークル会員の中でも最初から調査に携わった者の一人として感慨深いものがある。

我々の偉大なる指導者であった小林先生を不慮の事故で失った時はサークルそのものの存在さえ危ぶまれたものだが、幸いにして足立秀成氏という新たなる大黒柱を得られたことにより事無きを得られたのである。そして、月一回の活動において当初は順調に進むかと思われた調査も、寺院側の都合などで快い協力をいただけないところもあり、次第に壁に当るようになり遅々として進まなくなって来た時期もあった。会員の中にも倦怠感を覚える者も少なく無く、サークルの羅針盤を預かる者としての苦悩を感じることもあった。

そんな時、持ち前のバイタリティと旺盛なる探求心を持って独自に調査を続けられたのが小野木昌氏で、特に終盤あたりでは彼ひとりで調べられた寺院がほとんどである。従って、ここにまとめられたものは、歴史サークルの記録というより小野木氏個人による集大成というべきものであり、きっと後世に残る貴重なものになるであろう。

平成十年十二月

各務原市歴史サークル代表　大堀　等

―蘇原地区寺院―

「その四」（取材順）

山田寺	臨済宗	（寺島町）	一
無染寺	臨済宗	（寺島町）	十一
行念寺	真宗・大谷派	（野口町）	十六
平藏禅寺	黄檗宗「美濃加茂、大寧寺・海南禅師兼務」	（熊田町）	十九
寶藏寺	黄檗宗「同右・大寧寺・海南禅師兼務」	（東島町）	二二
大樹寺	臨済宗	（野口町）	二八
陽徳禅寺	臨済宗	（伊吹町）	三四
桂雲寺	真宗・大谷派	（伊吹町）	三八
法永寺	臨済宗	（島崎町）	四三
西厳寺	浄土真宗・本願寺派	（持田町）	四八
専琳寺	浄土真宗・本願寺派	（宮代町）	五一
竹林寺	真宗・大谷派	（三柿野町）	五七
大泉寺	浄土真宗・本願寺派	（東島町）	六一
龍泉寺	曹洞宗「無住、北洞瑞巌寺住職兼務」	（野口町）	六五
進禄寺	浄土真宗・本願寺派	（吉新町）	六九
浄念寺	真宗・大谷派	（大島町）	七四
正福禅寺	黄檗宗「無住・芥見、眞聖寺住職兼務」	（伊吹町）	八〇

★★那加地区よりの追加★★

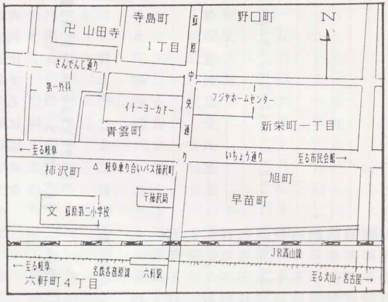
大願寺	浄土真宗・本願寺派	（那加長塚町）	八五

象耕山山田寺

■各務原市蘇原寺島町一丁目一〇一番地
名鉄電車六軒駅下車北へ約徒歩十五分
TEL・〇五八三（八二）七六四六

山田寺

住職　妙喜寺住職兼務
宗派　臨済宗妙心寺派
開山　如日和尚（越前・円城寺の僧）
開基　纐纈弥次右衛門宗寿（武儀郡保木脇村の住人）
本尊　釈迦如来（製作者・製作年不詳）
並びに諸仏　弘法大師・善光寺如来・戸隠九頭龍大権現・弁財天・毘沙門天。



現場見取図

歴代住職

☆当寺院の古代山田寺については織田信長の兵火に罹ったこともあり、旧寺院についての住職名を探求するのは不可能である。ただ、事後中興の山田寺については供養されている同寺の位牌を調べることにより、住職名の摘出は可能であった。しかし、順位や歿年については詮索不可能の為、ここではただ列記するに留めた。

＊開山特賜
僧正護命大法師不生位　承和元甲寅（八三四）年九月十一日於元興寺小塔院……寂　保齢八十有五
明治十五年夏制　武儀郡惠利寺生巌置之法弟承天謹書併刻焉

＊開山
當寺日照和尚大禅師　寶暦龍集六丙子（一七五六）年五月二十二日……寂　法齢七十有三

＊前住
當山昔賢珠和尚禅師　享保九甲辰（一七二四）年九月初六日……寂

＊前住妙心大恵
＊中興趙翁和尚大禅師……寂年不詳

當庵開基
＊明心無染尼上座　安永五丙申（一七七六）年正月二十八日……寂

＊蓮社嶽響在仙和尚……寂年不詳
＊密堂一杖首座……寂年不詳
＊大拙野斧上座……寂年不詳
＊日證禅築上座……寂年不詳
＊殊山槃愚上座……寂年不詳
＊霊泉観道上座……寂年不詳
＊一超直入上座……寂年不詳
＊絶山玄道庵主……寂年不詳
＊前長宗壽庵主……寂年不詳
＊永宗冨庵主……寂年不詳
＊長城老安上座……寂年不詳

瑞龍開山特賜
＊大興正宗國師大和尚……寂年不詳
妙心開山勅賜

＊本有圓成國師大和尚……寂年不詳

崇複開山勅諡
＊法智普光禅師大和尚……寂年不詳

＊當寺中興玄法句和尚禅師……寂年不詳

＊前住
當山月山素明首座禅師……寂年不詳

＊前住
當山璞堂連和尚禅師　明治十一戊寅（一八七八）年九月二十八日……寂

＊前玉鳳當山中興神應和尚禅師　明治三十九丙午（一九0六）年正月拾二日……寂

＊前住妙心
當山再建塵外幹和尚大禅師　昭和三十九甲辰（一九六四）年十月二十四日寂　七十八才
（現在当山は前住塵外幹和尚の直系久畠氏が管理されているが世襲されず、妙喜寺住職が兼務）

寺宝等

※塔心礎納置銅壺（佐波理製有蓋鋺）…国指定重要文化財。

舎利容器として使用されたもの。舎利は仏教を開いた仏陀や聖者の遺骨のことで、本来は重要な意味を持つ「塔」の中心になる礎石に穴（舎利孔）を穿ち、舎利を納めたもの。

しかし、実際には舎利を納めた訳でなく、これに代わる貴金属や宝石類が納められるケースもあった。この山田寺の有蓋鋺からも、明治時代に出土した際には金銭十文が納められていたとの伝承がある。

佐波理とは胡銅・響器とも表現され、銅を主に錫・鉛、または銀を混合した合金のことを云う。当の舎利容器は口径十・三センチ、高さ十三・四センチで、製作されてから千年以上の年月を経た現在でも、当時の輝きを失っていない。

蓋は宝珠の形のつまみを付け、それを取り巻くつまみ座は二重の段で、鋺の口縁部にも二重の細い圏線が巡らされ、器壁の薄さと併せて、当時の優れた金工技術の粋が伺われる。

この製作年代は明らかではないが、山田寺が七世紀後半に建立されているので恐らく、それ以前の七世紀前半に作られたと考えられている。この舎利器は、近くの無染寺境内に置かれている塔心礎石の孔ともピッタリ一致して、この礎石にあったものと確認されている。

※山田寺鴟尾瓦（長さ五七・四センチメートル）……市指定重要文化財・

鴟尾瓦は、かって中国の晋（紀元前六〇〇〜四〇〇年代）の時代から、大きな建物の屋根大棟の両端に飾られた物で一般家屋で云う鬼瓦と同じ主旨をもっている。

日本に渡ったのは飛鳥時代で、鴟尾は鎌倉時代ころまで使われたと云われている。この「鴟」は、中国の伝説に出てくる想像上の海魚で、日本の城に見る鯱と同様、雨を降らせる魔力があると云われるため、火災防止のまじないとして建物の屋根に飾られていたと思われる。

他にここから出土する瓦は、建物の軒先を飾る軒丸瓦や軒平瓦など当時、奈良の川原寺で用いられた同系統の紋様が使われており、これらは美濃地方の古代寺院跡全体とも共通していて、中央との繋がりがあったと思われる。

※山田寺塔礎石（舎利容器と共に国指定重要文化財）

……無染寺境内に置かれていて、詳細は無染寺の項で述べる。

※その他

＊善光寺奥院九頭龍王権現御玉・三尊一躰（大黒天，辨才天，毘沙門天）

＊山田寺跡礎石群（県指定の史跡）

＊古瓦類。

＊護命塔。（護命僧都は平安初期の僧。この地の出身で弘仁七丙申（八一六）年に大僧都、中央で活躍八三四年に没）

由緒

旧山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂が創建したという伝承がある。石川麻呂は大化の改新による功績によって右大臣にまで累進した人物として知られているが、大化五己西（六四九）年三月、異母弟の虚言によって謀反の疑いを掛けられ、大和の山田寺で妻子と共に自害して果てている。当時の山田寺の場所は、現在は桜井市である。かって、この山田寺を紹介した中に大化五年に石川麻呂が創建したと書かれていたが、五年の春に死んでいるのは不自然だ。

ただ此の石川麻呂について、この地方に係わりがあることは確かだろう。飛鳥田神社や加佐美神社、それに彼の墳墓だと伝えられている宮塚古墳。そして、旧山田寺の創建についてもその名が出てくる。だが、一方では寺島一帯から出土している各種の瓦類他からの検証でも、石川麻呂説の信憑性は薄いと思われている。

もともとこの地には六七二年の壬申の乱の折りに活躍した村國男依などがいて、こうした地方の豪族が、中央の政治的動向と密接に係わっていたこともあって、自らの地域支配の安定を確保する手段として、先進文化の象徴である寺院の建立に努めたことも十分考えられるのである。

このような疑問点は、岐阜県史でも当時この地方の支配者となって須恵器製造で中央との係わりを密にしていた各務氏の名を挙げ、山田寺創設説を打ち出しているが、いずれの説も確証が無いだけに推測の域を脱していない。

伝えによると、平安時代に此の地方の出身者として中央仏教会で活躍した護命僧都の尽力によって、旧山田寺は大寺院としての風格を備えたと云われている。その、かっての寺領と思われる領内から出土した塔心礎石、舎利容器、鴟尾瓦の他、単弁・細弁・複弁の蓮花文軒瓦や、本堂西側に一部配列が見られる礎石群などから推察すると、寺は七堂伽藍を備えた大寺であったことが伺える。

現在の山田寺は、享保年間（一七一六〜一七三六年）に武儀郡の保木脇村（現在の美濃市保木脇）の纈纈弥次右衛門と云う人が、伊吹村の小林三郎兵衛が所有していた畑を買い受け、そこに小庵を建てて「宗寿庵」と銘を付け、新加納村の少林寺の傘下に入ったのが最初だと云う。宗派もその際、臨済宗妙心寺派になった。かっての山田寺が、織田信長に焼かれてから一七〇年の後のことである。

「宗寿庵」は、もともと山田寺の跡地に建てられたと思われるが、伊吹村の小林三郎兵衛の耕作地は、現在のように文化財的価値の問われない時代であった。

しかし纈纈弥次右衛門は、そこにはかって護命僧都の縁りの大寺院が有ったことは伝聞などで知っていたものと思われる。したがってそんな情景に背を向けることができなかった一人だろう。その彼は現在の山田寺の開基に納まっている。

現在山田寺には、歴代住職を始め法灯を守ってきた尼僧のものと思われる位牌も何体か供養されている。これらの位牌は、「宗寿庵」以後の一七〇〇年代からの臨済宗妙心寺派時代のものも含まれている。こうした残っている古い多くの位牌の一つに、

「開基香梅院華岳政春居士」とある文字に憶測を走らせる。
この古い位牌群は、寺を守った住職のものが殆どだが、この位牌に囲まれた厨子の中に「院殿」と彫られた三体の位牌が目を惹く。寺に因縁のある武家のものとも思える。厨子の扉に印された違い鷹の羽には、下部に一本の線を加えた家紋もあって一般的ではない気がする。しかし確証はない。位牌には他に妻女の銘も書かれていた。

★源徳院殿流嶽漸東居士
★法雲院殿覚室清圓大姉
★山田寺殿久翁松山居士
★本成院殿即現法身大姉
★心浄院殿養岳以天居士

……考えられるのは当時此の辺りを分割して治めていた旗本の菅沼氏か、あるいは天領直轄の関係旗本の線も考えられるが、定かでない。

註、山田寺殿の後に、久翁松山居士と有るは後に書き込まれたものと思われる。

安置されていたものは金箔で飾られていて、他の住職の位牌と比較しても格段の差があり、ひときわ目を引く。その黒塗りの厨子の裏面には、かって文字が書かれていた可能性もあるが、読み取ることは無理なようだ。
庵はその後、元文二丁巳（一七三七）年十一月、堂守であった濃州武儀郡保木脇村の源右衛門・宗宙（纐纈弥次右衛門・宗寿の一族か……）が、越前国松岡円城寺の如日和尚をこの寺に招き寺格の向上に努める。
当時この寺の管轄をしていた役所の笠松代官青木次郎九郎が、如日和尚に心酔帰依したこともあって、古代に使っていた山田寺の寺号使用を許可。同名の「山田寺」と云う呼び名で現在に至っている。そのいきさつを記した古文書が寺に残っていた。

一札之事
一 濃州各務郡伊吹村之内寺島宗寿庵一箇所並ニ三十三所観音共ニ我々共相求
置候所ニ今度越前松岡如日和尚江差上申候所相違無御座候　若此庵ニ於テ
何様之儀申人御座候共　右一札請人之衆中として急度紀明可被申候
為ニ後日添手形仍而如件
元文二年巳十壱月
濃州武儀郡保木脇村
宗宙
源右衛門　印
如日和尚様

古代の山田寺跡に、新たに再建をされた山田寺は、一見連係している様に思われるが、実際は全く異質の寺ということになる。
この歴史に名を残した旧山田寺、現在は県が史跡に指定しているその貴重な礎石類も、江戸中期から明治に掛けての時代のなかで、多くの人の手によって持ち去られていた。この寺の近くに住んでいた水野朝吉翁は、十数年前に九十六才で亡くなられたが、生前こうした状況を編集者にも語ってくれた。
明治時代は、まだこの辺りは竹薮で昔のままの石積みや礎石があった。ここには、大きな寺があったことを物語る遺溝や石垣もあったが、村人の中には、そんな石垣を壊して勝手に持って行く者がいた。
こっちが気を利かせて注意をした処で聞く耳を持たず、かえって文句を付け恨む者も居た……。と

※護命
護命は天平勝宝二庚寅（七五〇）年、孝謙女帝の時代に美濃国各務郡で生まれたという、俗姓は秦氏と伝えている。康保二乙丑（九六五）年に出された「美濃国司解」の中に、各務郡大領、秦良実の記載があり、秦氏が当時この地にあって各務氏と並ぶ地方豪族であったことが分かる。（註、宮代の専琳寺伝には五命僧都の母の墓があるというが詳細は不明である。水野吉弘氏の説）
「日本高僧伝文抄」によると、護命は十才で美濃国分寺に入っているが、十才当時には既に大人を凌ぐ学識があったことが伺える。当時この地には山田寺を含め平蔵寺など堂塔伽藍が建ち、秦氏もこれらの寺と何らかの因縁があったことは確かで、そうした環境の中で育った護命は、自然と知識も身に就いたはずである。
国分寺に入った護命は、二年もすると法華・最勝二部・百論その他を暗唱したと伝えられている。尚「続日本後紀」によれば、十五才で故郷を離れ元興寺の万耀大法師に師事し、吉野山に入って苦行十七才で得度、十九才の神護景雲二戊申（七六八）年になると護命は、僧の法進について沙弥戒ならびに儀制をうけている。
法進は鑑真と共に渡来した律僧で、鑑真なきあとは律宗の総師として活躍した。
彼はこの時護命を評して、「汝独り能く律に遵いて、以ってかの脆曲の者をして之を観じて自ら矯せしむ。善きかな、善きかな、汝は則ち後世の優婆離（うばり）也」と、激賞したことが伝えられ

ている。
　その後高僧への道を上り大同元丙戌（八〇六）年には律師、弘仁七丙申（八一六）年には大僧都になってからの難事は、最澄との論戦であった。いわゆる大乗戒壇設立の要求にたいする対応である。最澄がその弟子たちに小乗戒棄捨を宣言、大乗戒壇設立の意思を明らかにしたのは弘仁元（八一八）年、その勅栽を仰ぐために、嵯峨天皇に提出したのは此の年の五月だった。その主旨を要説した「請菩薩出家表」に対して天皇は、これを僧綱に付して討議させた。
　護命らは「最澄が理想とする大乗寺なるものは、天竺にも無い、大唐にも無い。また日本にも無かったとしてこれを握り潰してしまったが、最澄はその後も何度か申請を試みている。（註：平安仏教は最澄「伝教大師」の推す天台宗と、空海「弘法大師」の称える真言宗の二教によって展開されていた）
　その主張するところは、従来行われてきた戒壇による授戒を否定し、僧綱支配よりの離脱を計るものであった。護命は最澄の唱える新仏教に対して、旧仏教側の中心となって論争した所謂宗教論争であった。が、弘仁十三（八二二）年三月、最澄は病に伏し六月四日に五六才で死亡した。
　ところが最澄の宿願は、藤原朝臣冬嗣や良峰朝臣安世の暗躍によって、死後七日目に勅許を得ている。護命にとっては全く承服し難い痛恨事であった。失望した護命は翌、弘仁十四（八二二）年、辞表を提出して僧綱を離れている。
　「続日本後紀」卒伝によると、古京（郷）山田寺に屏居していたと伝える。さらに、
　「拾遺往生伝」には、「護命は父母を訪ねんがために、たまたま旧里に出て山田寺に於て暫く稽留す」とあり、これによれば各務野の山田寺ということになる。
しかし、天長四（八二七）年一月八日には、護命は僧正に任じられ僧綱に帰り咲く。空海の詩文を編集した「続遍照発揮性霊集補闕抄」には、護命が学徳優れ、我が国仏教界の指導者として、最も相応しい人物と絶賛している。その護命天長七（八三〇）年には「大乗法相研神章」を著している。他に著述も多く残しているが、承和元甲寅（八三四）年九月十一日、元興寺に於て寂。

縁日

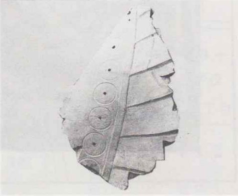
＊無縁法事（三月中旬）＊釈迦如来忌（三月十五日）＊釈迦如来誕生祭（四月八日）
＊施餓鬼（八月二日）＊地蔵尊「盆」（八月十六日）

歴代住職の墓碑

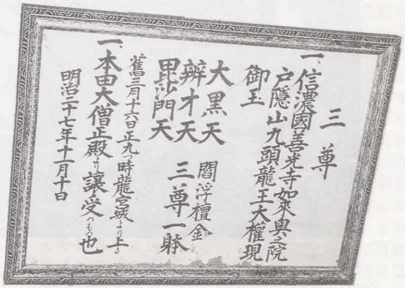
寺宝

山田寺塔心礎納置銅壺（佐波理製有蓋鋺）

本堂裏の護命塔



鴟尾瓦（しびがわら）
（現存長57.4cm）

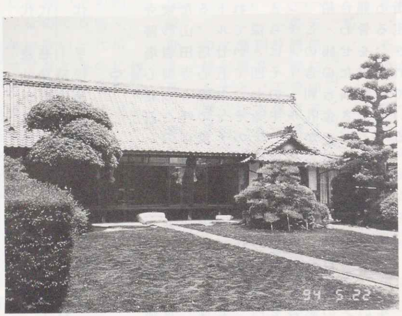

一、信濃國善光寺如来奥之院
戸隠山九頭龍王大権現
御玉
大黒天
辨才天　三尊一躰
毘沙門天　閻浮檀金
舊三月十六日正九つ時龍宮城より上る
一、本田大僧正殿より讓受つもの也
明治二十七年十一月十日

三尊一躰の由来

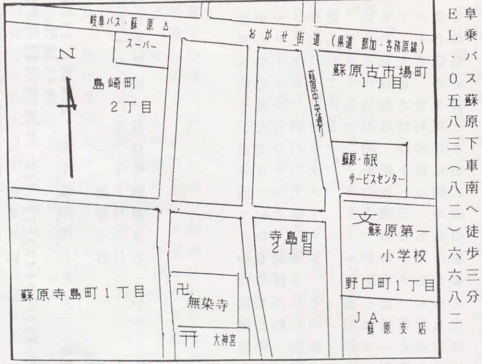
三尊

慈雲山無染寺

■各務原市蘇原寺島町二丁目十八番地
岐阜乗バス蘇原寺島町下車南へ徒歩三分
TEL・〇五八三（八二）六六八二



無染寺



現場見取図

住職　平松慈雲尼
宗派　臨済宗妙心寺派
開山（勧請）蘭陵慈芳禅師（文政十三年）「一八三〇年」
開基　水野惣七（伊吹村）
本尊　聖観世音菩薩（製作者・製作年不詳）
並びに諸仏

歴代住職

初代……祖栄尼……（寂年不詳）

……註・当山の開山は大安寺十四世、蘭陵慈芳和尚禅師である。

（文政十三年庚寅「一八三〇」は開山の歳、この七月八日水野惣七の記録帳に建立協力者に、当庵主・祖祐尼の名もある。この文政十三年は十二月十日に天保元年と改元・従って元年は廿日ばかりにすぎない。）

二代（？）祖祐尼……（庵の文机の裏に、天保二年「創建の翌年」大安蘭陵添焉・現住祖祐代とある）・・寂年不詳

……この間不詳……

中興二代　慈仙尼首座……（寂年不詳）

三代　慈法尼和尚禅師……昭和四十四己酉（一九六九）年十月三日……寂

……慈法尼和尚禅師については、戦前小学校で裁縫を教授されていた……

四代　平松慈雲尼（現住職）

寺宝

＊山田寺跡塔心礎石（国の重要文化財指定）

硬砂岩製のこの塔心礎石は、七世紀の後半（約千三百年前）この地に建立されたと思われる古代寺院の、塔の中心の芯柱を支えていたものだと思われる。塔心礎の規模は、礎面の長径が約一メートル五0センチ。短径が約一メートル廿五センチ。高さが約九十センチメートル。礎石の上部は滑らかに加工されていて、その表面部の柱座は、直径が約八十五センチメートル、その部分は、深さ四センチから七センチで円形に彫られている。

さらにその中心には、直径十六センチ、深さ十五センチメートル、底辺が六センチメートルの舎利孔（仏舎利容器を納めるための円形の穴）が彫られている。この舎利孔から発見されたと思われる舎利容器は、佐波理製の有蓋鋺（銅と鉛・錫の合金で造られた蓋付きの鋺）で、大きさは径十・三センチ、蓋と鋺を合わせた高さが十二・八センチメートルある。舎利容器は、もともと釈迦の火葬骨を供養する舎利信仰に基ずいて、塔心礎の舎利孔に納めるためのものである。昭和三十六（一九六一）年に、この塔心礎とともに国の重要文化財にに指定されている。

もともとこの礎石は、現在地より五0メートルほど西方の竹藪の中に埋もれていたものを、明治時代になり、土地の人達によって此処に運ばれてきたものである。かってこのあたりは、七堂伽藍を有し隆盛を極めた山田寺の敷地であった。その舎利容器のほうは、現在近くの山田寺に保管されている。

＊文机。

……抽出しの裏に書かれた文字……

「天保二卯天孟冬吉良辰　現大安蘭陵添焉」

「各務郡曾原郷之内寺嶌　圓通山普門禅庵佛前用現住祖祐代」

（註・天保二年は、一八三一年で創建の翌年に当る。孟冬は、陰暦十月の別名。吉良辰は吉日と同意。（辰は、辰の日のことか…？）蘭陵とは、大安寺の再中興をした第十四代蘭陵慈芳のこと。和尚は、文化十三丙子（一八一六）年、笹野妙光寺より大安寺に転任、同寺塚宗の跡を継ぎ、嘉永六癸丑（一八五三）年五月二十四日に寂）

＊蓮花紋軒丸瓦（寺領敷地内より出土）

由緒

ここの文机には、「圓通山普門禅庵」の墨書きが残されている。創建された翌年の祖祐尼の時代の物である。現在、寺に残る縁起書（開基、水野惣七が遺した文政十三（一八三0）年七月八日付けの記録帳によると、かってこの地には「無禅庵」と呼ばれて建っていたのが廃庵となっていた。もともとはこの寺、往昔僧堂に三千人を容した山田寺の寺有地に建つ寺の一つ（塔頭・たっちゅう）だとも思われるが、詳細については分からない。

しかし、かって隆盛を極めた大安寺地内にも、数か寺があったと伝えられていることを考えると、この地にもそうした寺があったとしても不思議ではない。

そのかって存在した「無禅庵」を再建という意味も含めて、文政十三庚寅（一八三0）年に新たに前記の水野惣七により建立（再建？）されたと記録している。ただ、この文政十三年については、十二月十日に天保元年と改元されている。正確には、この十二月十日は、西暦一八三一年一月二十三日になる。従って建てられたのは、この日以前で、十一月迄の間ということになる。

　この建立に際しては、伊吹村字寺島（現在の寺島町）の住人であった水野惣七という者が一念発起、自己の四十二才の厄年を機に施主願人となって、鵜沼村大安寺の蘭陵和尚を勧請し大安寺の末寺として開山に至ったと伝えている。

　なおこの建立については、願人自身が三畝拾六歩の土地を寄付している。その際、大安寺からは「柱建御手伝い金」として三両を下付され、初代庵主の祖栄と、もう一人の祖祐という庵主さんと二人で二両を寄付している。

　縁起書（記録帳）には、この時の取り持ち役として、甚左衛門・円助といった名も見られるが、この二人は寺島の住人と思われる。なお、前出の惣七が寄付した土地については、当時の売値価格では金五両位とも記されている。寺は、大安寺の系統傘下をとり「無染寺」と名を替えて現在に至っている。

　なお前記の寺に残されている文机に書かれた天保二（一八三一）年は、創建の翌年にあたり、そこに書かれている「……佛前用現住粗祐代」は、初代の祖栄尼が寂のため後を継いだと云うことか……？。

　いずれにしても、寺は現在も大安寺の傘下として法灯が守られている。

縁日（年中行事）

＊釈迦涅槃会……（三月十五日）
＊春季彼岸会……（三月）
＊釈迦生誕会……（五月八日）
＊盆施餓鬼……（八月十六日）
＊秋季彼岸会……（九月）

（出土の蓮花紋軒丸瓦）

歴代和尚の碑

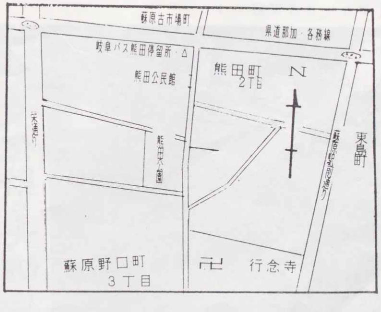
国の重要文化財の山田寺塔心礎

河野行念寺

■各務原市蘇原野口町三丁目五十一番地
■岐阜バス熊田下車南へ徒歩五分
TEL・0五八三（八二）一七七四

住職　小島秀賢（第十三世）
宗派　浄土真宗（大谷派）
開山　行念和尚（西入坊第七世）「明應元（一四九二）年十月
開基　行念法師
本尊　阿弥陀如来（製作者・製作年不詳）
並に諸仏　親鸞聖人

河野山行念寺



現場見取図

歴代住職

世	法名	没年	寂年
創建開山	釈行念法師	明應六丁巳（一四九七）年十月朔日	九0才寂
二世	釈行圓法師	……歿年不詳	七八才寂
三世	釈行心法師	……〃	八0才寂
四世	釈林貞法師	……〃	九0才寂
五世	釈恵春法師	……〃	七五才寂
六世	釈順應法師	天明五乙巳（一七八五）年三月十五日	七五才寂
七世	釈智聞法師	文化十癸酉（一八一三）年二月十日	七五才寂
八世	釈因誠法師	嘉永六癸丑（一八五三）年八月三日	七三才寂
九世	釈秀賢法師	明治二十四辛卯（一八九一）年九月十九日	八四才寂
十世	釈徳善法師	明治三十五壬寅（一九0二）年十一月二十九日	六四才寂
十一世	釈徳應法師	大正五丙辰（一九一六）年二月二十五日	五三才寂
十二世	釈行心法師	昭和五十四己未（一九七九）年四月二十四日	八三才寂
十三世	現住（秀賢住職）		

寺宝

別にない。

由緒

当寺は、もともと西入坊の隠居寺として造られる。時の西入坊第七世行念法師により、明應元（一四九二）年十月に、西入坊の東隣の地に創建されたと云われている。時は室町幕府第七代将軍足利義植の時代で、この地はともかく、京、大和方面では土一揆が起きていた時代である。

西入坊七世の行念法師は、一四七九年四月蓮如上人が京都山科に本願寺を創設以来、山科まで月々の参詣を怠らなかったと云う。その行念法師八十一才の延徳二（一四九0）年、その年七十六才になっていた蓮如から「老いの身で月々の参詣は痛々しい…」と言って寿影を賜っている。この尊影は西入坊に寺宝として残ってるが、隠居寺を創建したのはこの二年後と云うことになる。ただ行念寺開山の行念法師の寂年令は、九0才ではなく西入坊の過去帳に基づくと、八十八才でなければならないが、いかがなものか…。

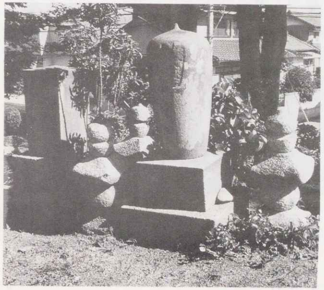
さて、時は流れその後約三百数十年を経た嘉永六年（一八五三）に至って、行念寺九世、秀賢住職の時代

現地からこの野口の地に移設され現在に至っている。

縁日

＊七月・夏之文（蓮如上人御文）　＊一月十日〜十一日・報恩講

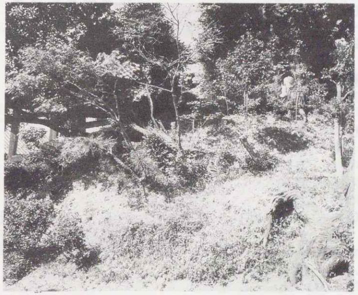
歴代住職の墓碑



行念寺住職の墓

＊その他

境内には、かつて三基の古墳（円墳か）が存在したが、現在は寺の鐘楼の脇に直径約十八米・高さ約四米のもの一基しか残っていない。一基は明治三十五年頃、本堂再建の際破壊され、他の一基も何時の時代かに破壊されている。その一基から、六世紀頃の物と思われる鏡が出土している。尚、関東から帰路の親鸞聖人が東海地区で教化を行ったのは一二三〇年代で、行念法師は明應六（一四九七）年十月に寂。（蓮如大阪に石山坊を創建の年）



鐘堂東側に残る古墳　（住職の墓あり）

無盡山平蔵禅寺

■各務原市蘇原熊田町二丁目二十番地
岐阜バス熊田下車南へ徒歩二分
（無住職）（美濃加茂市・大寧寺住職兼務）

平蔵禅寺

現場見取図

住職　現在無住（美濃加茂市・大寧寺住職兼務）
宗派　黄檗宗
開山　開山師・不詳「明和八辛卯（一七七一）年の創建と伝える。
開基　不詳
本尊　十一面聖観世音菩薩（作風は鎌倉時代前期、製作・製作年不詳）
並びに諸仏　千手観音座像（懸仏）十一面四十二臂変化観世音像（結跏趺座）（あぐら）

歴代住職

以前は妙心派末寺であったが、明治三庚午（一八七〇）閏十月、現在岐阜市の芥見にある永福山清水寺末寺として本山に黄檗宗の寺院として届けられている。なお明治中期に、自称を善頌こと林善次郎が最後の住職（一説には無資格者で、単なる堂守だったと伝える人もある）として此の寺を住家としていた。しかしその息子が死亡したため、昭和三十八年に、その供養のつもりで寺標と無縁塔を建立したという。だが、その後間もなく本人も死去したため、寺を継承する者も無いまま廃寺同然の無住の寺となっている。現在は、地域の住民によって管理されている状態である。

寺宝

＊千手観音座像。

＊十一面四十二臂変化観音像（直径十五センチ余、平板状銅版製。重量一五〇瓦。

☆昭和六十（一九八五）年十月一日、市重要文化財指定）

沿革

もともとは熊田村の平造という百姓が、裏沖（字名）の平藏寺と呼ばれている水田の中から、古仏（十一面観音像）を拾い上げ、これを祠って寺としたと云う伝説がある。明和八年（一七七一）というが詳細は不明なり。尚観音像を拾い上げた裏沖には、かって古い昔、平藏寺と呼んだ別の宗派の寺があった所だと伝えられている。

さてこの無住の寺は、太平洋戦争中の昭和二十年六月、米軍機の焼夷弾が落ちて焼けたために、その後熊田地区で再建して同地区で管理をしている。

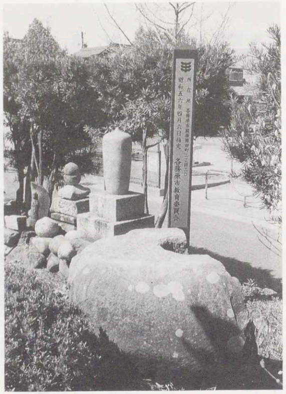
しかしこの本堂も、昭和三十四年九月二十六日夜の伊勢湾台風によって倒壊した。

現在の建物は、野口村の大地主、安積家の診察室を譲り受けてこの地に移築したものである。

その他

本堂内中央部には、約八十五センチの聖観音座像、その右側に阿弥陀如来像、釈迦涅槃像図絵。左側には、弘法大師の座像が安置してある。

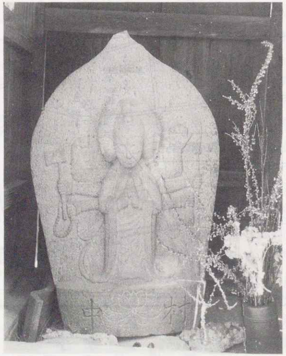
なお境内には、弘化三年（一八四六）に村中で建立されたという馬頭観音石像もある。ほかに、中濃新四国第三十四番霊場の石柱が往時を偲ばせる。



☆平藏寺跡塔心礎

☆昭和五十六（一九八一年四月六日に各務原市の史跡に指定されている。

この半分は岐阜市の東別院内に有ると云われている。



☆馬頭観音石佛

石蔵で高さ六〇センチ、幅は四〇センチの馬頭観音。裏面に弘化三丙午（一八四六）年の彫刻がある。台座には「村中」と銘記。

護国山寳蔵寺

寳　蔵　寺

■各務原市蘇原東島町三丁目四十六番地
岐阜バス坂井停留所下車
北へ徒歩三分
TEL・0五八三（七一）二六九七

現場見取図

住職　無住（美濃加茂市大寧寺、五島海南禅師が兼務住職）
宗派　黄檗宗
開山　鐵舟元英和尚（寛文十年）
開基　丹崖禅和尚
本尊　薬師如来（身丈・約七十センチ。厨子内に安置秘仏）製作者・製作年不詳
並びに諸仏　聖観世音・弘法大師・馬頭観世音・地蔵菩薩。

歴代住職

当寺は昭和五十八年（一九八三）年に第十三代峻良仁岳和尚が他界された後、一時無住化した期間があった。この間に、寺の資料などが侵入者によって持ち去られため、詳しい寺伝や、歴代の住職の代号などは調査不能・従って、墓石碑より抽出した和尚銘の不明な点は、黄檗宗法系の芥見真聖寺のご協力により列記する。

記（歴代住職二・三代については、芥見真聖寺住職が本山にて調査筆記による）

＊護国開山鐵舟元英大和尚　享保四己亥（一七一九）年四月初日夜……示寂
＊護国第二代雪津鑑禅士和尚　明和八辛卯（一七七一）年九月二十六日……示寂
＊護国第三代不傳傳禅士　明和四丁亥（一七六七）年十二月二十四日……示寂
＊護国第四代天宗衍堅大和尚　天明七丁未（一七八七）年四月十七日……示寂
＊護国第五代海音如潮大和尚　天保六乙未（一八三五）年七月十二日……示寂
＊護国第六代肯嶽真諾大和尚　慶應二丙寅（一八六六）年三月四日巳上刻……示寂
＊護国第七代石門通透大和尚　明治四辛未（一八七一）年八月十二日……示寂
＊臨済正宗四二世寳蔵九代鐵心仁肝和尚……示寂年不詳
＊護国第八代・第十代心田弘耕大和尚　大正十四乙丑（一九二五）年六月二十七日……圓寂
＊護国第十一代・第十三代峻良仁岳大和尚（住持は太平洋戦争に應召の為、妻女が十二代帰還され十三代の形をとる）　昭和五八癸亥（一九八三）年十二月二十三日「八〇才」……圓寂
＊護国第十二代光江廣俊尼和尚（峻良仁岳和尚の坊守「妻女」）　昭和二十乙酉（一九四五）年十二月二十二日……圓寂
（現在は美濃加茂市加茂川町一丁目、醫王山太寧禅寺の五島海南住職兼務）

寺宝

＊本尊、薬師如来・
＊本山二世、木庵大和尚一軸・

由緒

当寺は寛文十庚戌（一六七0）年に鐵舟元英和尚によって開山されたと伝えられているが、寺院が創建されたのは、開山から十八年後の貞享元甲子（一六八四）年だといわれている・

云寺は元々熊田村にあった平蔵寺の東北に当る地に建っていたのを、現在地に真言宗

の空き寺がありこれを利用、現愛知県常滑市神明町の「祥光山龍雲寺」の三代住持であった鐵舟元英和尚が、法弟にあたる天休道無の請に応じて寶蔵寺開山となった。隠居地として当寺で享保四年に遷化す。（龍雲寺は尾張藩家老竹腰家菩提寺系譜……）

寶蔵寺の代々住職は、寺子屋を開いて読み書きを教えていたと云うことである。教育施設の無い当時としては当然、寺はこうした手習いの場を提供したであろう。

現状では、同寺の檀家は僅か数軒である。現在、ここの総代は吉新町に在住の川出喜市氏（取材時）で、法要などは寺縁の美濃加茂市の太寧寺十一世の五島海南住職が兼ねている。

寺で現在堂守をされている鈴木鳳雲氏は佛師で、先ごろ三年を掛け精魂を傾けての苦心作、等身大の隠元禅師の彫像が、数年前中国の隠元禅師の故郷の地、福建省福州のに贈られている。当時現地では熱烈な歓迎であったと云う。

この福建省の宗祖隠元禅師の故郷には、その敷地二十万坪に黄檗宗の萬福寺が建てられていて、隠元禅師生誕四〇〇年祭行事のために、はるばる日本の各務原の地から海を渡って、尊像が納められたのである。

現地では、「恭迎隠元禅師象駕面山」を掲げ、中国の大勢の人たちが、鈴木氏の彫像を迎えている。鈴木氏は、日中友好のための大きな役割も果たされていた。いっぽうこの寶蔵寺については、鈴木氏のご子息の鈴木洋氏が、美濃加茂市加茂川町の太寧寺十一世の五島海南和尚の法弟子として、将来この宝蔵寺の法灯を継ぐために、もっか京都の宇治にある本山「黄檗山萬福寺」で修行をされているということである。

☆☆日本黄檗宗の開祖隠元は、中国の明の時代萬暦二十年（一五九二年）に福建省福州府の福清で生まれている。父は林徳龍、家が貧しく十才で学を止め母を養うと記録あり。その後、普陀山に観音を拝して佛道に入る。黄檗山の鑑源について僧となり、臨済を究めて玉山第一位径山興聖萬寿寺費隠の後を嗣ぐ。

この頃長崎在住の中国人は、興福寺・福済寺を建てて自国から禅僧を招いて弔祭を乞うために多くの禅僧が渡来していた。隠元禅師は、日本から再三招請を受けて承應三甲午（一六五四）年七月渡来した。その六二才（数え六三才）の隠元を長崎に招いたのは興福寺の逸然だと云う。

隠元は来日するや直ちに興福寺を開堂、更に崇福寺に於て開堂している。このとき妙心寺の龍渓・禿翁・竺印らは隠元を妙心寺に迎えようと運動、まず京都所司代であ

った板倉重宗を通じて大老の酒井忠清・老中松平信綱の諒解を得る。そして、明暦元乙未（一六五五）年、隠元を摂津富田の普門寺に迎えていた。

以後幕府は次第に隠元を重んじ、萬治元戊戌（一六五八）年には隠元は江戸に出て将軍家綱に謁している。この翌年幕府は、隠元のために宇治に一寺の開設を許可している。寺は寛文元辛丑（一六六一）年に着工、翌年に開堂して、黄檗山萬福禅寺と号した。幕府はこの寺に寺領四百石を寄進している。黄檗宗の開祖である隠元は、日本に渡来してから二〇年目の寛文十三癸丑（一六七三）年四月三日に病の為、黄檗山松隠堂で八十二才の生涯を閉じている。

後水尾法皇は隠元に、大光普照国師の号を贈っている。その後大正六丁巳（一九一七）年に至り、更に真空大師の諡号が贈られ更に昭和天皇より、華光大師号が贈られている。その著書に「廣録」三〇巻、他に「年譜」二巻がある。

かつてはこの各務原の地に本寺をはじめ平蔵寺など黄檗宗傘下の寺が存在したが、真宗仏教の台頭繁栄によって衰微し他は無人化している。

……*註・歴史辞典では隠元禅師の示寂年を延寶元年としているが、正しくは、寛文十三年の九月二十一日に延宝と改元されているため、示寂月の四月はまだ寛文であるので、ここでは寛文と訂正する。

※その他

*境内の馬頭観音像は、宝暦十一辛巳（一七六一）年三月に智秀尼建立の銘あり。

……（当寺の法系にも智秀尼は見られぬが、法弟子の一人か……）

*地蔵菩薩像は、宝永八（一七一一）年四月二日に建立の銘あり、高さは四六センチほどある。

……（宝永八年は此の二十三日後の、四月廿五日に正徳と改元されている）

*五輪塔七基は、高さも七〇センチとそれ以下のもので、風輪もそれぞれ異なっていて、元々はこの辺りに散っていた無縁仏のものを住職が集めたものらしい。

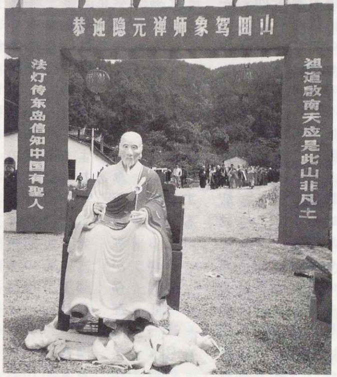
かって戦国時代には、此の地方でも多くの犠牲者が出ている。資料収集で幾つかの寺院を訪れているが、こうして供養されている無縁の五輪塔を目にする。この寺の五輪塔も、恐らくそうした種類の仏たちだろう。

縁日

※八月十日（祖先の供養と、盆施餓鬼行事）

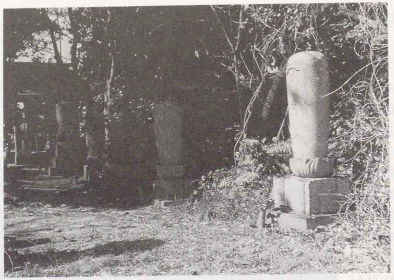
開祖 隠元禅師よりの法系

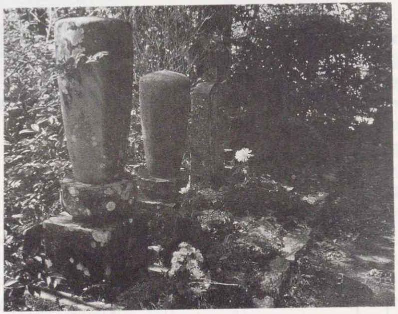
＊隠元大師
＊木庵性・大和尚（本山二代）
＊湛然道寂大和尚
＊鐵舟元英大和尚
＊翠山浄秀大和尚
＊雪津鑑禅士
＊不傳傳禅士
＊天宗衍堅大和尚
＊海音如潮大和尚
＊肯嶽真諾大和尚
＊石門通透大和尚
＊心田弘耕大和尚
＊峻良仁岳大和尚
＊光江廣俊尼和尚
＊……美濃加茂太寧寺・海南和尚兼務

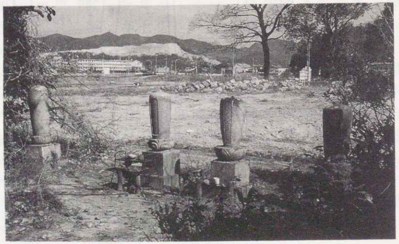


中国現地に到着時の隠元禅師影像

歴代住職の墓碑





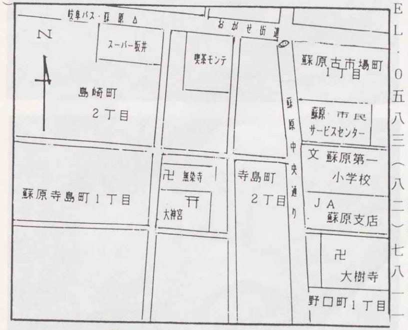


蔭涼山大樹寺

■（美濃新四国第八十四番）
各務原市蘇原野口町一丁目十五番地
岐阜バス蘇原下車
東南へ徒歩約七分　JA蘇原支店南隣り
TEL・〇五八三（八二）七八一一

大　　樹　　寺

住職　幸田延章（航州延章和尚）
宗派　臨済宗妙心寺派
開山　北禅禅秀和尚（勅諡聖帝廓然禅師）
開基　安積清右衛門
本尊　聖観世音菩薩（製作者・製作年不詳）
並びに諸仏　地蔵菩薩・弘法大師・子安観世音菩薩



現　場　見　取　図

歴代住職

開山	北禅禅秀和尚（勅諡聖帝廓然禅師）	延宝六戊午（一六七八）年五月念三日…示寂
	桐峯抱和尚	延宝七己未（一六七九）年九月朔日…示寂
	天真祖全首座禅師	元禄二己巳（一六八九）年六月十五日…示寂
二世	賓山禅功和尚	宝永元甲申（一七〇四）年九月念三日…示寂
三世	勝通智大和尚	享保八癸卯（一七二三）年正月五日…示寂
四世	天従禅昌和尚	宝暦三癸酉（一七五三）年三月十四日…示寂
五世	曲泉義沸和尚	宝暦五乙亥（一七五五）年二月晦日…示寂
	見玲・・和尚	示寂年月日不詳
六世	藍畦守玉和尚	天明六丙午（一七八六）年八月十五日…示寂
七世	見玲禅一和尚	文政元戊寅（一八一八）年八月二十八日…示寂
	・領和尚	文久二壬戌（一八六二）年正月十日…示寂
	翁鍜和尚	示寂年月日不詳
	培禅和尚	（天保年間に在住の記録有り）示寂年月日不詳
	活翁祖快首座禅師	示寂年月日不詳
	鑑道和尚	示寂年月日不詳
	忠厳和尚	明治十二己卯（一八七九）年旧二月十九日…示寂
	清洲源和尚	昭和二十乙酉（一九四五）年七月十一日…示寂
八世	浄州正順和尚	昭和三十五庚子（一九六〇）年三月十五日…示寂
九世	航州延章和尚（現住職）	

註・開山～九世は、正法山妙心禅寺宗派図龍泉派拍庭門派宗派図により付ける。

寺宝

＊聖観世音菩薩

由緒

当寺は禅宗系の臨済宗妙心派の末寺として、野口村の名主安積清右衛門が、寛文元年（一六六一）に廓然禅師・北禅禅秀和尚（愛知県名古屋市総見寺第四世）を開山として招請し、自らが開基となって創建したと伝えられている。この創立について、一説では慶長十七年（一六一二）ともいわれているが、墓碑に

彫られている開山の示寂年が延寳六年（一六七八）から推察すると、慶長十七年では廓然禅師は、まだうら若いことになる。少なくとも、招請を受けて開山師となるには、寛文元年が禅師の年齢的にも妥当と思える。

なお蘇原町史や蘇原の社寺考の資料にも、開山の廓然禅師は郭であるが、位牌や墓碑には「廓」となっている。従って住職欄を含めここでは、「廓」を用いることにした。

寺はかって無住の時代もあり、しかも領主の悪政や飢饉などもあって、経営は困難を極めるとともに、領主側の役所としても利用されたものと思われる。とくに徳山分家の悪政問題の際、領主側が大樹寺を出張の拠点として領民に弾圧を掛けた史実は、記録に生々しく残っている。

ところで、開基の安積清右衛門は代々の名家で大庄屋であり、子孫も「清右衛門」を襲名していたことは、市の資料などでも明らかである。

◇・徳山分家の悪政

この大樹寺は、その後の貞享三丙寅（一六八六）年に旗本の徳山家の第三代の領主徳山五兵衛重政が、その子供に分家として、この蘇原地区の野口・島崎・熊田の一部を与えたので、以後この土地は徳山の分家が収め支配するところとなった。

大樹寺はこうしたこともあって、分家の初代以下の菩提寺ともなり、ここには徳山分家代々の位牌や墓碑がある。

ところが幕末の文政九丙戌（一八二六）年ころより、江戸虎の門内の村瀬平四郎の次男で徳山分家の養子に入った徳山主計が、領民に対して過酷な年貢の取り立てを強行した。しかも主計は、渡り侍の佐々木惣左衛門を取り立ての為に召し抱え、悪逆暴力的な行為を繰り返すに至っている。

天保二辛卯（一八三一）年五月に上統と書かれた島崎村の「両村騒動一件記録」には、領民が幕府へ窮状を訴えた状況がこと細かく書かれていて、当時の状況を委さに知ることができる。

「御地頭所徳山主計さま御當代、虎の門内、村瀬平四郎さま御次男御養子にて、
折りから御勝手向き成されず、御本家徳山五兵衛さま御勝手向き同様に付き、
渡り侍、佐々木惣左衛門（一名近藤六藏と云う）と申す者新規御召し抱え、

御知行所御陣屋更木村へ、文政九戌年より初めて佐々木惣左衛門罷り越し
御知行所の七ケ村の内へ、高掛御用金ならびに御見立て御用金身元不相応に
申し付け……控え田地の空き地の立ち木も伐採代金引き揚げ、村々再検地
申し渡し、田畑や居屋敷迄縄張り致し……無慈悲道の役人……云々」

陣屋からは役人が来ても慣れ合いであったり、他の新しい役人は、佐々木の勢いに恐れて批判する者もなかったと文面は続く。

彼等は再検地に協力しない者は、老若児女まで無差別に打擲致し、手鎖・牢舎を強行していた。

この文面には、徳山本家も勝手せずとあるが、これは本家九代の徳山五兵衛貞賢が寛政十年（一七九八）に十八才で死んだため、本家ではこの年急遽、急養子として十代を徳山五兵衛秀起が継いでいる。この秀起は、天保七年（一八三六）に本丸目付になって、年代的には、この十代の秀起が該当する。その本家が、分家の悪行にも目をつむって黙認していたことが伺い知れる。

島崎文書では、文政十二年二月二十七日の項に、大島村の庄屋周蔵方から、役人が此の大樹寺に毎日来ていたとある。大島村は徳山の本家の領分であり、この取り立ての被害は免れているが、この大島村の庄屋周蔵は、代々造り酒屋（木村屋八右衛門を襲名）していた小野木周蔵こと七代の八右衛門のことである。

この七代の八右衛門は、明和二（一七六五）年酉年の生まれである。文政十二（一八二九）年の騒動の当時では六十五才になっている。死んだのは天保十己亥（一八三九）年二月四日で七十五才、死の一日前に書いた辞世も過去帳に残している。

この周蔵の孫娘「すみ」が、鵜沼村の石工・縣長助に嫁いでいる。昭和初年に亡くなった此の人が、造り酒屋だった大島の実家に跡取りが無いため、田宮如雲の家臣で明治初年、各務野の開墾に従事した尾張藩士の尾崎廣三郎と云う侍の長男で「鼎」が入り婿に迎えられた所へ、自分の娘「かく」を嫁がせている。

その「すみ」は、当時実家に役人たちが泊っていたことを祖母から聞かされ、自身も親から聞いて知っていて、それを娘の「かく」にも平素から聞かせていた。「かく」は母親の里へ跡を継ぐ為に戻った形になったが、七代八右衛門こと周蔵の倖になる八代目八右衛門に嫁いだ義母からも、この野口村の騒動時に婚家が役人宿を勤めたことなど家族が体験した詳細を知っていた。それを、「かく」にも語っている。

　当時、七代八右衛門と周蔵の妻であった祖母は、岩田村の田上家から来ていた人で、騒動のあった十九年後の弘化五年（一八四八年）に七十九才で死んだが、庄屋としての家の切り盛りをしていて、家計と酒造りの要を預かっていた。

……代官所から来た役人が大勢で何日も家に寝泊まりして、野口の方へ出かけるので、毎日家の者は食べ物の世話が大変だった。家の者は、倉の中に寝泊まりしていた。作る弁当も、家中の者が手伝ってやっていた。役人たちが引き揚げたあと、代官所からは協力したと云ってお褒めの書状も戴いた……と。

　騒動記録は、大樹寺を起点として徳山の分家が領民を苦しめた記録である。とくに二月二十七日には、桐野村・更木村・大島村下役三人召し連れ、十手・捕縄・手鎖等に多分に取り持ち厳しく出立、大樹寺へ出没。佐々木惣左衛門は村々庄屋残らずそれぞれの者大勢召し連れ、「大島村庄屋、周蔵方まで出張り差し控え」三か村（野口、熊田、島崎）の様子により、すぐ様乗り込み申すべく……と、記録は生々しい。

　……この騒動の結果は江戸への直訴となったが、その後、全員が無事無傷のまま帰郷していているのは喜ばしい。他の騒動例のように、直訴は命掛けであった。ここの場合は処刑されるような事態も無く、直訴が成功した唯一の例とも言える。

　しかし、例え村役人としての義務とはいえ、悪代官側に加担した小野木家は、周蔵の倅「慶助」の代になると酒造のほうも下火になり、領民ともしっくり行かなくなっていた。八代八右衛門の慶助は、頭は切れたが一端決めたことは後に引かない性分が祟り、言動も高飛車であった為、村人の反感を買い維新の前には、代官所に組したことも災いして、これまで代々の庄屋が祢宜として管理してきた神社の倉の鍵を取り上げられた上、そこに保存されていた祖先が記録してきた文書一切までも首謀者格の横山忠三郎（各務用水に名）他に焼かれている。その上、反対派は八代目の慶助を狂人扱いで更木の牢に押し込んだ後、残った女子供の目の前で、家の中まで村人に荒させている。

　八代を継いだ慶助は明治になって家に戻ったが、孫娘の「かく」の面倒をよく見ていたと云う。実父周蔵の執った処置を評価し続け、あくまで信念を曲げなかった慶助も、明治十四年の六月七十七才で他界している。

　考えてみれば、この男も徳山分家の一方の被害者であったのかも知れない。

　大樹寺を起点とした騒動に、編集者の祖先が執った行為は、悪代官方への味方だっ

た。因果は巡るというが、養子に入った尾張藩士の長男は、家屋を含め二町歩の田畑と財産の殆どを各務用水のほうに継ぎ込み借金のみを残して昭和十一年に他界した。

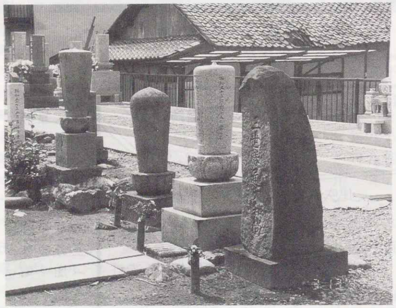
（祖先の執った行為に、慙愧の念耐えがたく此処に付記した……）

年中行事

＊仏涅槃会（三月十五日）
＊仏誕生会（五月八日）
＊盆施餓鬼会（八月四日）

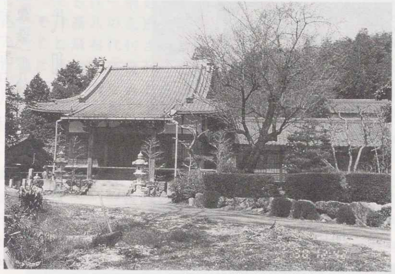
歴代和尚石塔

開山・廓然禅師



勝通智大和尚
浄州正順和尚
天真祖全和尚
鑑道和尚

法雲山陽徳禅寺



陽　徳　禅　寺

■各務原市蘇原伊吹町三丁目十三番地
岐阜バス蘇原下車
北へ徒歩約二0分加佐美神社西方
TEL・0五八三（八三）00三七

現　場　見　取　図

住職　関　元泰
宗派　臨済宗妙心寺派
開山　壁立祖仭和尚（大安寺第六代）
開基　〃
本尊　聖観世音菩薩（製作者・製作年不詳）
並びに諸仏　地蔵菩薩

歴代住職

開山　壁立祖仭和尚大禅師　寳永元甲申（一七0四）年十月十三日……示寂
二世　梁室禅棟和尚禅師　文化四丁卯（一八0七）年十月二十九日……示寂
三世（中興）家哉祖珍和尚禅師　明和二乙酉（一七六五）年一月九日……示寂
四世　覺海孤舟和尚禅師　文化四丁卯（一八0七）年十月二十九日……示寂
五世　梅岩宜常和尚禅師　文化七庚丑（一八一0）年七月一日……示寂
六世　俊芳宋逸和尚禅師　文化四…丁卯（一八0七）年五月三日……示寂
七世　久巖師啓和尚禅師　弘化三丙午（一八四六）年九月二十八日……示寂
八世（再建）戒州玄珠和尚大禅師　明治三二己亥（一八九九）年一月二十九日……示寂
九世　泰岳玄龍和尚禅師　昭和十六辛巳（一九四一）年四月二十九日……示寂
十世　大法龍眠和尚禅師　昭和十四己卯（一九三九）年九月十四日……示寂

寺宝等

＊（1）十一面観音菩薩……「現在の本尊は聖観世音」であるが、かっては、十一面観世音菩薩を本尊としていた。しかし、何度も罹災の難に遭ってその際、平蔵寺（熊田）が寳蔵寺（東島）に避難の為預けられ、そのまま現在に至っている……。

＊（2）過去帳……「過去帳」を寺宝として取り上げるのは些か意に反するが、その表紙に應永二十（一四一三）年と記されていて、六00年にならんとする昔の物となれば興味深い。ただ、そうなるという年代的に開基・開山とされる壁立和尚よりずっと古い時代となり、もしそうだとすると、壁立和尚は中興となってくる……。

沿革

言い伝えによると、寛文四甲辰（一六六四）年の創立説があり、壁立和尚が旅の途中に菴を建てたのが始まりとされる。従って、開基が開山を兼ねたと云うことになっている。

（註・壁立和尚は大安寺の第六代の壁立祖仭和尚のことと思われる。ただ大安寺史によると、壁立和尚は法弟子として大安寺で修行・寛文十庚戌（一六七0）年の二月に同寺五代の石叟宗根和尚が寂のあと、同十年に六代住職になっている。

したがって寛文四年は、その壁立和尚が法弟子の時代に此の地に菴を建てたと謂う事か……。亡くなったのは宝永元（一七〇四）年の十月十三日と寺史は記す）

当寺は歴史のある寺院であるが、過去三回に渡る罹災により、古文書・寺宝の類は殆ど焼けていて無い。

その三度目の災害は、昭和二十年七月十二日夜、太平洋戦争時に於ける米軍機ボーイングB二九大型爆撃機による焼夷弾空襲である。

この空襲により、伊吹地区では一般農家も焼け、本堂もその時焼失全焼した。なお投下されたエレクトロン油脂百キロ焼夷弾は、爆発力も絶大で不発弾も多かったが、爆撃目標が民家であったため、付近の田や河川にも数百発が投下され、爆発すると直径二メートル深さ一・五メートルの穴を開けていた。なお当夜の空襲により熊田の平蔵寺も全焼している。

ところで、此の本堂の裏手にある加佐美山の麓一帯は、古い字地名では「城屋敷」と云われていた。この辺り、戦後の農地解放前までは陽徳寺の寺領であった。当時、この辺りから数十基の五輪塔も出てきている。

加佐美山にはかって「八幡山城」という城があって、伝説では人見清蔵、または人見清次と云う武将がいたと云われている。永禄年間に岐阜城の斎藤龍興に攻められて滅び、跡が絶えたとも云われ、いっぽうの説では、織田信長に攻められ戦死したとも云われて定かでない。かって長い間、ここの加佐美神社の神官をされてきた坂井家の説によると、岐阜城を織田軍が攻めるとき、池田の軍勢が加佐美山に居た。家に伝わる文書によると、坂井家の娘を、池田の殿様が側女として連れていったようだ……、と云う。いずれにしても、この辺りから出てきた五輪塔は織田信長が岐阜城を攻めたとき落城戦死した城兵を弔ったものではないかと推定されているが、定かではない。

寺は過去三回の罹災に遭ったと伝えている。従って、永禄十年八月の織田勢の岐阜城攻めの際にも、寺島の山田寺と同様、陽徳禅寺は兵火に遭っていたと推定できる。

かって古い時代には、このあたりに東山道が通っていたとも云われている。奈良時代に花開いた仏教文化は、この付近に飛鳥や須衛器の産地を生み、市場を繁栄させていた。

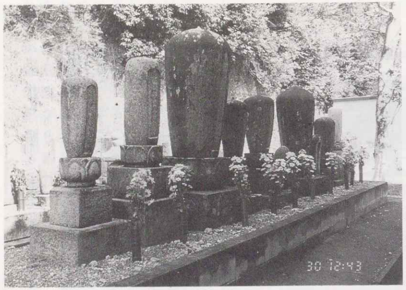
こうしたことから推測すると、この土地そのものが古代の主要道沿いにも面していて、山田寺を含め古代寺院があっても何ら不思議ではないし、加佐美山付近に古墳らしいものが点在するのを見ても、遠い時代へのロマンも求めたくなる環境にある。

縁日その他（年中行事）

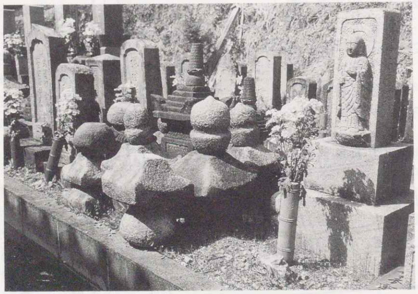
＊大般若祈祷会（一月一日）　＊春・秋の彼岸会（彼岸の中日に行う）

＊大施餓鬼会（八月五日）

歴代住職墓碑



寺内に供養の住職墓碑



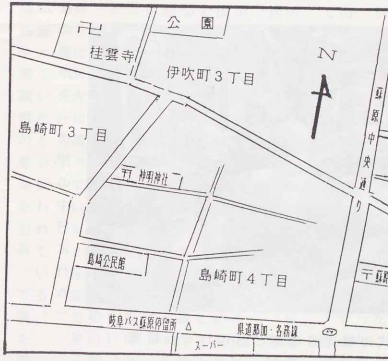
戦国時代の戦死者の物と思われる五輪墓

花開山桂雲寺

■各務原市蘇原伊吹町三丁目七〇番地
岐阜バス蘇原下車
北へ徒歩約十五分
TEL・〇五八三（八二）七三一四

桂　雲　寺

住職　巌城　護
宗派　真宗大谷派（東本願寺）
開山　順宅法師
開基　小林忠左衛門
本尊　阿弥陀如来（立像）
並びに諸仏　聖徳太子・親鸞聖人・蓮如上人・親鸞聖人行脚像



現　場　見　取　図

歴代住職

初代	釋順宅法師	寛文五乙巳（一六六五）年二月七日……寂
二代	釋照恵法師	正徳三癸巳（一七一三）年七月十九日……寂
三代	釋蓮恵法師	享保十八癸丑（一七三三）年十一月二十九日……寂
四代（再興）	釈観旭法師	明和四丁亥（一七六七）年十二月二十九日……寂
五代	釋潤識法師	文化十二乙亥（一八一五）年九月二日……寂
六代	釋香玄法師	文政十一戊子（一八二八）年六月十八日……寂
七代	釋蓮成法師	嘉永元戊申（一八四八）年七月十六日……寂
八代	釋義専法師	安政三丙辰（一八五六）年十一月二十六日……寂
九代	釋含章法師	……寂年月日不詳
十代	釋霊城法師	明治八乙亥（一八七五）年十二月十五日寂
十一代	釋霊性法師	大正五丙辰（一九一六）年三月十五日……寂
十二代	釋篤隆法師	大正十一壬戌（一九二二）年七月十八日……寂
十三代	巌城大鳳（前住職）	……釋大鳳
十四代	巌城　護（現住職）	……釋玄護。
	巌城浩人（候補衆徒）	

寺宝

別に無し

由緒

本寺はその頃伊吹村の大庄屋であった小林忠左衛門と称する者が、岩滝村（現在は岐阜市の岩滝）にあった真願寺の協力もあって、その分寺格としての名号を受け、寛永五戊辰（一六二八）年の十一月四日に創建したものだと伝える。なお岩滝村の真願寺は、当時は願善寺と称していたらしい。

かって一二〇〇年代には、親鸞が此の地方を布教したことによって、那加地区を始めとして天台宗から浄土真宗に転宗した寺院が多くあった。しかし真宗は、一五〇〇年代になると、織田信長による弾圧に苦しめられたのは周知の通りである。

なお本寺は創建から約九〇年後の、享保六（一七二一）年には、本堂建立の寄進帳が出されている。その本堂は享保十一（一七二六）年に完成していると記録がある。

工費は、当時で弐百五拾両余りであったと云う。

そして寺は、再建から三十数年過ぎた四代の観旭住職の宝暦十一（一七六一）年になって再び再興された。不慮の災害でもあった為の再興だったのだろうか。しかしその後二〇〇余年を経た平成の世になると、堂宇は老朽化も進み修理自体も不能の状態となった。

こうした状態を見かねて、桂雲寺門信徒・地元他檀家・門信徒の親戚の方々等の多大なるご浄財によって、本堂再建の計画が現実のものとなり、平成五（一九九三）年七月、請負業者である関市の亀山建設と契約を結び、木造七間四面堂の本堂が建立される。運びとなり、平成八（一九九六）年三月十六日に至って上棟式が古式に則り行われた。そして平成九（一九九七）年三月二十九日には、桂雲寺本堂再建落慶法要が厳粛に営なまれたのである。

その翌日三月三十日は、蓮如上人五百回御遠忌法要も営なまれ、庭儀（稚児行列）には一千人の仏（ほとけ）の子供たちが参列した。

なお前出の真願寺は、中将姫誓願桜で有名な願成寺（現・岐阜市大洞）の支坊の一つ、醍醐坊が前身である。

縁日（年中行事）

＊修正会…………（元日より三日まで）

＊仏教婦人会（二月十一日）「午前・物故者追弔会。午後・報恩講」

＊彼岸会……………（春季・秋季）

＊永代経・納骨法要……（春季・秋季）

＊花まつり（四月）……（釈迦生誕祭で白象パレード有り）

＊お盆経……………（盂蘭盆会）

＊報恩講……………（十二月十七日・十八日）

＊日曜学校・子供の報恩講（十二月二十八日）

＊同朋会「八日会」……（毎月八日に開催）

天保十四歳
各務郡大洞
村瓦師玉田
傳右エ門内
同苗嘉助作
之本堂再建

…天保十四年は一八四三年…

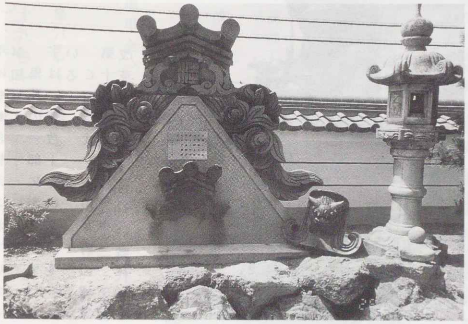
※古い鬼瓦に刻まれた文字※

親鸞聖人の行脚像

本堂の瓦は、その後の天保十四年にも葺き替えられていたことが知れる……鬼瓦の一部に彫られていた文字は、百数十年の歳月を伝えている。

この時代、徳川幕府の将軍は第十二代の家慶（いえよし）。天保の改革で庶民は苦しい時代。

歴代住職の墓碑

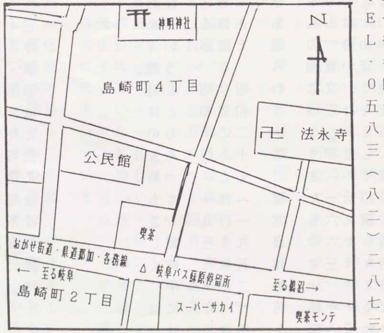


百数十年前の瓦師の記名がある鬼瓦

萬年山法永寺

法　永　寺

■各務原市蘇原島崎町四丁目三九九番地
岐阜バス蘇原下車
北へ徒歩四分
TEL・〇五八三（八二）二八七三



現　場　見　取　図

住職　吉田諦識（旧姓田中）
宗派　臨済宗妙心寺派
開山　體道和尚禅師（少林禅寺中興二世……との説あり）
開基　飯沼勘平長實（詳細については不明）
本尊　釈迦如来
並びに諸仏　弘法大師・千手観音・地蔵菩薩

歴代住職

長く無住の時代もあり、開山以後の住職についての記録も無い従って判明している住職について記録した。

＊開山以後……不詳。
田中大王住職は滋賀県に転住されていて示寂年月日等不詳。
＊先々代　今枝義温尼禅師……示寂年月日等不詳。
＊先代　今枝儀順尼……昭和二十二・三年頃示寂と伝え他は不詳。
＊現、吉田諦識住職

寺宝

※別に無い。

由緒

当寺は無住職の状態がしばしば続いていたため寺歴自体の資料も乏しく、はっきりした詳細については不明である。この寺は無住ということもあって、戦時中には俗人も一時住んで居たようである。

現住の吉田諦識住職は、佐渡が島の出身であるが、昭和十四（一九三九）年三月、智山専修院長・権中僧正倉持秀峰師の智山専修院を卒業のあと修行を重ね、佐渡が島真言宗智山派の末寺、宝珠院の住職を経たあと、昭和二十七（一九五二）年から当寺に於て住職の任についておられる。

当寺は自力本願の寺で、寺の維持管理は檀家も限られていて、経営自体も苦しいと云う。

現在の寺は、もともと西市場にあったものをこの地に移してきたもので、移転時は無宗の寺であったと云う説もあるが一節によると、寛文三癸卯（一六六三）年八月の創建とも云われるが、今のところ立証するものは無い。なお言い伝えでは、一五〇〇年代に飯沼勘兵衛という者が、一家（一族…？）の守り寺として招請したとも云われている。寺はそうしたいきさつが関与しているのか、現在も、数軒の飯沼家だけの檀那寺であるという。

この飯沼勘兵衛というのは戦国時代に生きた武士で、慶長五庚子（一六〇〇）年八月二二日、関ヶ原の戦いの前哨戦とも云うべき米野（現在の羽島郡笠松地区）の戦い

に於て、石田三成側についた岐阜城勢西軍の大将格として参戦。池田輝政の率いる東軍と激しく戦ったが運命は味方せず、敢え無く敗れ戦死した。その飯沼長實（ながざね）の名が勘平だったと云うので、勘兵衛とは彼のことだろうと考えられている。

その飯沼長實は、以前に姉川の合戦で功があったと云われる飯沼長継の子で、最初は秀吉に仕えていたが、秀吉が亡くなった後は織田信秀（三法師）に仕えていた。

また長實の子長資（ながすけ・またの名を小勘平と云った）も、この時の戦いで討ち死にしている。長資は、まだ若干二十才の若さであったと云う。

此の長資の父で飯沼勘平の墓というのが、今も羽島郡笠松町の、米野地区東の外れにある水田の中に祀られている。

現在、島崎町に住んでいる飯沼家の祖先は、この関ヶ原の前哨戦で亡くなった飯沼勘平（長實）の子孫だと伝えられている。

○飯沼長就（ながなり）
一五〇〇年代の、美濃池尻（安八町）城主。はじめ土岐頼芸に従い、のちに斎藤道三に仕えて三千貫を領す。弘治二丙辰（一五五六）年四月、長良川付近で道三と義龍が戦ったとき討ち死にしている。

○飯沼長継（ながつぐ）
長就の子で織田信長に仕えていた。元亀元庚午（一五七〇）年六月、近江の戦国大名浅井長政が、朝倉義景と結んで信長に背いたための戦い「姉川」での勲功によって後に秀吉に仕えていたが、天正十一癸未（一五八三）年、織田信長の三男の信孝に内通したとの疑いで、秀吉に殺されている。

○飯沼長實（ながざね）
長継の子、秀吉に仕えたのち織田信秀（信長の孫・三法師）に仕えていたが慶長五庚子（一六〇〇）年八月二十一日、信秀が関ヶ原の役に西軍に属したために、米野の戦いで岐阜城外で討ち死にしている。またの名を勘平という。

○飯沼長資（ながすけ）
長實（ながざね）の子で、この年の八月二十二日に岐阜城外、米野の地で東軍の池田軍と戦い二十二才で討ち死にしている。またの名を小勘平という。

羽島郡の米野にある史跡の説明には、

「慶長五年（一六〇〇）八月二十二日（今の暦では九月二十九日）に、木曽川を渡った東軍の池田輝政ら一万八千と、これを迎え討つ西軍の百々綱家（どどつないえ）らの岐阜城兵三千二百は、この付近で激しく戦った。これが関ヶ原戦の前哨戦となった米野の戦いである。
この時、東軍が挙げた二百二十七の首は円城寺に葬った。岐阜城兵の半分近くが戦死したとも伝えるが、東軍側にも多くの戦死者が出た。
翌日東軍は岐阜城を攻め落とし、東西二十万の軍勢が関ヶ原へ向かうことになる。西軍の飯沼小勘平の墓は、ここから二百五十メートル北にある……」

かっては尼僧も住んでいたこともあるという寺、その先々代の今枝義温尼は、市内北部の飛鳥にある観音堂からこちらに移住して来られたと云うが、観音堂は尼僧一人では無用心で落ち着ける場所ではなかったらしい。

たまたまこちらの法永寺の和尚が滋賀県の地に転住して、空き寺になったのを機に当寺に入住したものと伝える。跡を継いだ義順尼は、義温尼の娘であったと聞く。

なお飛鳥の観音堂近くに住む人の伝えによると、明治時代に尾張地方出身の今枝義俊という尼僧が観音堂の堂守をしていた。その義俊と名乗る尼僧は、幼女を後継者にするつもりで養育をしていたが、昭和の初年に死亡したという。いっぽう養女であった尼僧も、その後何れかえ去ったため観音堂のほうは以来無住になっていると伝える。

この養女であった尼僧というのが先々代の今枝義温尼だということが分かる。推測だが、観音堂を去るいきさつも、当時の農村地帯では公然と行われてきた因習が起因になっているのだろう。その、義順尼を身ごもる羽目になった無用心な風土的状況から、先々代の義温尼は当寺に逃避してきたものと思われる。

――現地では男たちが忍びこんで困ったらしい……。

そんな話もここには伝えられていた。現在では考えられないようなことも、古い時代にはまかり通っていた。忌む史実は戦争だけではなかった。

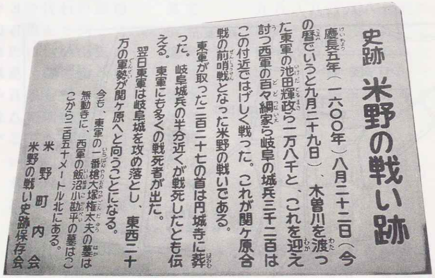
無縁日

＊無縁法事（三月上旬）

＊盆施餓鬼（八月中旬）

歴代住職墓碑

住職墓の一部が供養されている



史跡　米野の戦い跡

慶長五年（一六〇〇年）八月二十二日（今の暦でいうと九月二十九日）、木曽川を渡った東軍の池田輝政ら一万八千と、これを迎え討つ西軍の百々綱家ら岐阜の城兵三千二百はこの付近ではげしく戦った。これが関ケ原合戦の前哨戦となった米野の戦いである。

東軍が取った二百二十七の首は円城寺に葬った。岐阜城兵の半分近くが戦死したとも伝える。東軍にも多くの戦死者が出た。

翌日東軍は岐阜城を攻め落とし、東西二十万の軍勢が関ケ原へと向うことになる。

今も、東軍の一番槍大塚権太夫の墓は無動寺に、西軍の飯沼小勘平の墓はここから二百五十メートル北にある。

米野町内会
米野の戦い史跡保存会

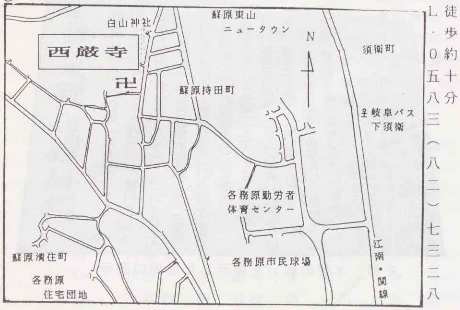
史跡・米野の戦いを掲示した現地の表示

清光山西巌寺

■各務原市蘇原持田町二丁目一三五番地
岐阜バス下須衛下車
西へ徒歩約十分
TEL・０五八三（八二）七三二八

西　巌　寺

住職　小川貫式
宗派　浄土真宗（本願寺派）
開山　釈了願（在家出身）
開基　釈教傳
本尊　阿弥陀如来（木造立姿・身の丈三尺程）
並びに諸仏　親鸞聖人・聖徳太子・七高僧



現　場　見　取　図

歴代住職

開山（初代）	釈了願	大永三	癸未	（一五二三）年	寂
第二代（開基）	釈教傳	延寳五	丁巳	（一六七七）年	寂
第三代	釈順智	寳暦十	庚辰	（一七六０）年	寂
第四代	釈順教	寛政七	乙卯	（一七九五）年	寂
第五代	釈智海	天保二	辛卯	（一八三一）年	寂
第六代	釈高厳	文政四	辛巳	（一八二一）年	寂
第七代	釈智道	安政六	己未	（一八五九）年	寂
第八代	釈智観	明治八	乙亥	（一八七五）年	寂
第九代	釈宗観	明治九	丙子	（一八七六）年	寂
第十代	釈普観	明治三０	丁酉	（一八九七）年	寂
第十一代	釈貫練	昭和十九	甲申	（一九四四）年	寂
第十二代	釈貫式	（現住職）			

寺宝

◎二度にわたる災害でその都度庫裏が焼け、寺宝や貴重な資料は無いが、開山了願像・歴代住職画像・親鸞聖人像・七高僧像・蓮如像等。

由緒

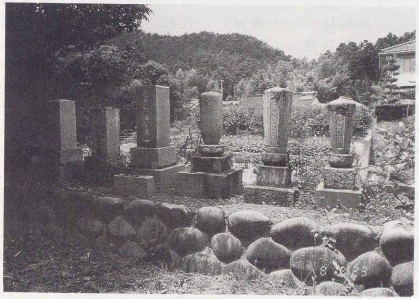
当寺は大永三（一五二三）年に、蓮如の子で本願寺の第九世門主「実如」の時代に創立されたと云われている。開山は在家出身の了願と云う人と、寺の第二代にランクされている釈教傳によって創建されたと云う。この開山師の了願法師のほうは、創立した年に亡くなられていっぽうの開基とされている釈教傳のほうは、寺の第二代住職になっていて、十年先に没した六代が、五代を世襲も何かの理由か……。寺は大正年代（一九一二〜一九二六年）に失火で焼け、昭和二十年（一九四五）には、米軍機の空襲によって再度に渡り焼失したが、不思議とこのいずれも本堂だけは無事であった。寺院では仏の加護によるものだと言われている。

縁日（年中行事）

＊永代経（春・秋の彼岸日）

＊報恩講（十二月二十五日〜二十八日）

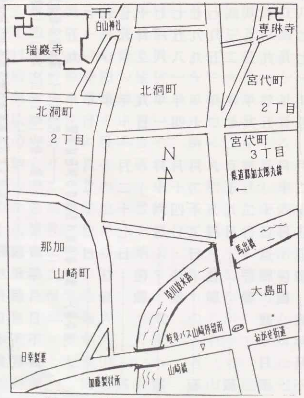
歴代住職墓碑


寺領内に供養

大洞山専琳寺

■各務原市蘇原宮代町一丁目四七番地
岐阜バス北洞下車東南へ徒歩五分
TEL〇五八三（八二）三三〇二

専琳寺



現場見取図

住職　横山大悟
宗派　浄土真宗（本願寺派）
開基　信證院蓮如上人
開山　正善法師（専琳寺創建一世）
本尊　阿弥陀如来
並びに諸仏　薬師如来・弥勒菩薩

歴代住職

一世　釈正善
二世　釈誓玄
三世　釈正空
四世　釈空法
五世　釈正誓
六世　釈正圓
七世（中興）釈順慶
八世　釈宗順
九世　釈梅順
十世　釈秀山
十一世　釈順道
十二世　釈順諦
十三世　釈順明
十四世　釈順誓
十五世　釈順諦
十六世　釈堅正
十七世　釈晴臣（前住職）

文明五 癸巳（一四七三）年四月浄土真宗に改宗……寂年不詳
寂年月日不詳
天文七 戊戌（一五三八）年・？……寂　月日不詳
——山科本願寺一乱の折り本願寺に味方して功あり。所以に現本尊阿弥陀如来を頂戴と記す——
天文七年（一九三八）専琳寺本堂を薬師寺風から本願寺風の寝殿造りに大改造。……寂年月日不詳
……寂年月日不詳
慶長年中（一五九六〜一六一五年）・「一六〇三〜一六一四年、無住」……寂年月日不詳
——寺暦には、岐阜乱の時寺暦位牌を持って出死と記す——
万治二 己亥（一六五九）年 旗本徳山氏の斡旋にて安楽寺二男、入寺住職。
正徳元 辛卯（一七一一）年七月二十二日……寂
寶永七 庚寅（一七一〇）年……住職
寶暦六 丙子（一七五六）年十一月二十七日……寂
十月二十九日……住職
明和五 戊子（一七六八）年一月十六日……寂
宝暦八 戊寅（一七五八）年四月十四日・住職
寛政十一 己未（一七九九）年十一月二十二日……寂
寛政七 乙卯（一七九五）年二月九日・住職
天保三 壬辰（一八三二）年七月十九日……寂
嘉永七 甲寅（一八五三）年九月二日・住職
明治二 己巳（一八六九）年五月十日退職・寂年月不詳
明治二 己巳（一八六九）年五月十六日・住職
明治十 丁丑（一八七七）年五月二十日退職・寂年月不詳
明治十 丁丑（一八七七）年六月二十日・住職
寂年月日不詳
昭和二十二 丁亥（一九四七）年八月三十日……寂
昭和十一 丙子（一九三六）年十一月五日・入寺
昭和四十二 丁未（一九六七）年六月二十二日……寂
昭和四十二 丁未（一九六七）年七月二十四日・住職

十八世　釈大悟（現住職）　平成六 甲戌（一九九四）年四月二十九日・住職

寺宝

＊薬師如来本尊（木佛）
＊彌勒菩薩本尊（木佛）
＊蓮如上人御染筆六字名號掛け軸（本山許可）

由緒

開化天皇の皇子で彦坐王が三野（美濃）の国造としてこの地の統治にあたるなど、古い時代から美濃の地は、中央との係わりが深かった。そうしたこともあり、白鳳の元年、いわゆる壬申（六七二）の年に、大海人皇子が兵を挙げたのに呼応して、此の美濃の地からは、各務郡の村国男依らが参加して大功を立ている。したがって、美濃の地は、ますます中央との絆が強くなっていく。この地に大和に因んだ地名や、山田寺など中央に似た寺院などが建立されたのも、こうした所以に基ずいたものと考えられている。

この壬申の乱に、大海皇子側に協力した村國男依は、その功績により天武帝から下賜された高麗伝来の御佛舎利と、毘首羯磨の造る観世音菩薩小像を納めるべく、芥見の里に芥見山間堂を創建、これらの佛像等を安置している。

そして養老五 辛酉（七二一）年、泰澄大師が山間堂を現在の地に移し、大洞山清水寺と號す。その後天平年（七二九）代に入ると、聖武帝による佛教への造詣が深いこともあって、天台宗を基盤にした寺院が各地に台頭を見せてくる。その天平十七 乙酉（七四五）年、清水寺観音の霊験により日野金丸の出現ありて奈良に大佛云々と、美濃史は記す、その祝いの為に、聖武天皇より如意山願成寺との勅號を賜わり、大僧正行基をして十一面観世音の像を彫刻させ、先に村國男依の納めた前記二像をその観音像の胎内に藏せしめて七堂伽藍と十二坊を建立したと記す。この十二坊のなかに岩井寺、同じく醍醐寺（現在岩瀧真願寺）が創建されている。

（本派本願寺派）記には、当「専琳寺」の項・由緒に

当寺は天平年間（七二九〜七四九年三月）に各務郡大洞村に山間堂伽藍を建立ありて、薬師如来を本尊とし祟信す。しかし、承平七 丁酉（九三七）年、藤原純友の賊兵来たり願成寺及び十二坊七堂伽藍も兵火の為に焼失し、本堂一宇残りしを、鎌倉将軍

頼經の承久三辛巳（一二二一）年、小島太郎（良）重俊鎮守府将軍に命じて、七堂伽藍寺下十二坊を再建した…と記している。その際現大洞村の一箇所を寄付、寺領として観世音及び毘沙門天の二尊を安置したと記す。

なお其節、岩井寺・日輪寺・法華寺・醍醐寺・清水寺・専念坊の六箇寺ある中の頭寺として、岩井寺は薬師如来を鎮護。文和年中（一三五二〜一三五五年）に山間堂破損に付き、宮代村岡山に移転し天台宗本尊薬師如来の称号を取り、薬王寺と改称す。

かっては、願成寺の塔頭の一つとして栄えた岩井寺であった。その天台宗傘下の岩井寺は、薬師如来を本尊としていたが、南北朝がそれぞれの年号を確執するなど、足利幕府に対する武士団による不安な動きもあって、世は決して安泰ではなかった。この時代、専琳寺の前身である岩井寺は、こうしたことも原因でこの宮代の地に移って来たのとも思われる。

いっぽう世相は厳しく、北朝の後光厳天皇は貞治元年を称え、南朝では後村上天皇が正平十八年を持続していた。その一三六二年に、岩井寺は濃州各務郡岡山の地へ、薬王寺として薬師如来を奉うじて移ってきているのである。

この各務郡岡山というのは、現代の各務原の北部に位置する宮代村（町）の旧名である。しかし、薬王寺がこの地に移ってからの約百二〇年間の詳細については、寺にも記録はなく全く不明である。

大洞山専琳寺が寺歴の記録として間見えるのは、初代の、釋正善住職の文明五年からである。当時、住民の心の拠りどころであった宗教も、武家政治による権力の荒波には常に翻弄される運命にあった。記録が散逸したのもこうした時代背景があった。

慶長七壬寅（一六〇二）年の春、真宗の本山である本願寺が、政治権力の思惑によって東西に分立したのは歴史的にも知られている。以来、東西の本願寺は互いにその勢力を競い、諸国の坊門下末寺も、それぞれが所縁によって東西を選び派を分かつことになった。この蘇原地区の寺院でも、東（大谷派）所属が五か寺、西（本派）所属の寺院が四か寺存在している。当専琳寺は、その本願寺派に属す。寺伝の記録による寺の創建については、文明五癸巳（一四七三）年四月と云う。寺に残された記録には「浄土真宗本願寺法主殿、信證院蓮如上人。当美濃ノ国ニオ成リノ節、当寺ニモオ立チ寄リ下サレ、コノ時ノ住僧正善ト云エル者、浄土真宗ノ御宗風ニ的シテ、オ弟子トナリ、蓮如上人御染筆ノ六字名號ヲ頂戴シ、真宗トナリタリ」と記す。

もともと天台宗は、最澄（伝教大師）が延暦二十四（八〇五）年の八月に遣唐船で帰朝したあと、延暦寺を中心に各地に教えを広めている。こうしたこともあって、この美濃の国にも多くの天台宗門下の寺を開いた。

当時の平安仏教は、最澄（伝教大師）の天台宗と、空海（弘法大師）の真言宗の二つの宗派を中心に展開されていた。

しかし貞永壬辰（一二三二）年になると親鸞聖人が各地を巡り、浄土真宗を広めたことにより、この蘇原地区を始め順次真宗に改宗する寺院が増えていく。

すでに那加地区でもこの時代に、親鸞聖人が関東から上洛の途中で、尾州葉栗郡門間の庄「木瀬」…（現在の岐南町三宅木瀬）の草庵での化道をされたことにより、善休寺・法蔵寺・正厳寺が天台から真宗に改宗している。しかし、一四〇〇年代の半ばに入ると、親鸞によって布教に力を入れた真宗も衰微の兆候が見られるようになる。

その状況に危惧感を抱いた蓮如が、改めて親鸞の足跡を追従したことは歴史にも明らかである。なお当地でも前野の覺王寺は、享保十年乙巳（一七二五）に真宗に改宗している。したがって大洞山専琳寺の改宗年も、寺伝が述べるように、蓮如上人の布教活動によって感化されたことは否定できない。

この専琳寺の記述のなかに、三世の正空住職が山科本願寺一乱の節、本願寺に味方をして働いた……と、ある。これに関連して、史実では興味深い記述がある。

「天文元壬辰（一五三二）年六月、本願寺証如、細川晴元の求めに応じ、河内に畠山義宣を攻めて自殺させる。堺に三好元長を攻めて自殺させる。八月、証如、晴元を堺に攻める（六月には共闘したが、今度は攻めている）。六角定頼、法華宗徒を率い、山科本願寺を焼く。証如、大阪に逃れる。

翌天文二年の二月、晴元は堺で一向宗徒と戦い、敗れる。六月、晴元は証如と和睦する」と伝えている。

……専琳寺年代録に、一五三二年、三世の正空法師は本願寺に協力して現阿弥陀如来をご褒美に頂戴せり。と云うのは、この時の事案と思われる。だとすれば、この阿弥陀如来は戦禍を逃れた佛像で、歴史的に価値のある仏様である……

なお当寺の本堂は、四世の空法住職が天文七年（一五三八年）に改築されてより、四百年の年月を経て居たため、昭和十四年（一九三九年）に、第十五世順諦住職の時代に再建され、現在に至っている。（註・寺史には天文七年が一五三九になっていますが、一五三八年が正解です……）

付記

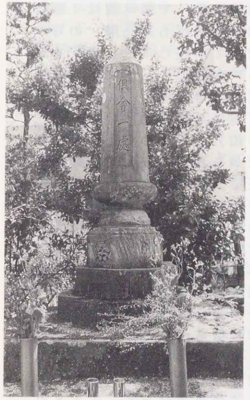
※「当寺の言い伝えによると、弥勒菩薩尊像は、六四九年〜六六〇年間に、「寺島の山田寺ヨリ岡山（宮代）ニ堂舎祀置レタリ薬王寺来山以後薬師如来像ト同並祀シタリキ」と残す。

かって寺島の山田寺取材のおり、当地出身の護命大僧都に関する塚が、この寺の近くに有るという説を耳にした。護命は、歴史的にも有名な宗教論争を最澄と論じた高僧である。弥勒菩薩像はこうした史実も踏まえて推測するに、山田寺と護命の関係からしても、何らかの因縁関係があるかも知れない。

縁日（年中行事）

＊報恩講……………………………………（一月五日・六日）
＊春季永代教・入門式、初産式「小学校入学生」（四月の土・日）
＊婦人佛教会総会……………………………（八月）
＊秋季永代教、法悦会………………………（九月）
＊除夜の鐘……………………………………（十二月三十一日）

歴代住職墓碑



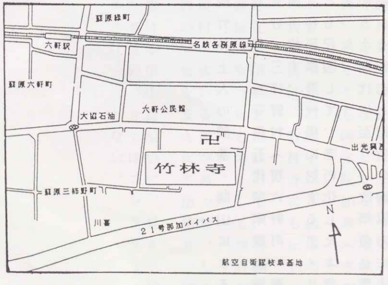
寺領内に供養

佛国山竹林寺

■各務原市蘇原三柿野町九二二番地
名鉄各務原線六軒駅下車
南東へ徒歩十分（旧二十一号線沿い）
TEL・〇五八三（八二）四七一五

竹林寺

住職　森知照（第八代）
宗派　浄土真宗（大谷派）
開山　竹林上人（寶蔵院と号す）
開基　〃
本尊　阿弥陀如来（立姿・約八〇センチ尊像）
並びに諸仏　蓮如上人・観音菩薩。



現場見取図

歴代住職

初代（開山）寶蔵院釈竹林上人（元禄年間

二代　法蔵院釈開順（寶暦年間

三代　釈義老法師（嘉永年間

四代　釈義誠法師（慶應年間

五代（中興）開闡庵釈僭竜法師（明治年間

六代　易往院釈昇道法師（大正年間

七代　順教院釈徹照法師（昭和年間

八代　（現住職）

寺宝

無し

由緒

竹林寺は元禄十三庚辰（一七〇〇）年創立の寶蔵院竹林上人の開基・開山による寺と伝える。

自来衰退を変遷、時移って明治十一戊寅（一八七八）年、当寺第五代開闡庵龤龍住職が、岐南町三宅村にあった浄福寺の古御堂を譲り受け、三柿野村（現六軒町）第二小学校、校下の信徒の協力を得て、竹林寺の本堂を中興再建す。

以来風雪に耐えた寺院も太平洋戦争時末期には、各務原飛行場に対するアメリカ軍による空襲等もあり、もと古御堂であったことも起因して、老朽化した本堂は白蟻の被害と重なり、再修理も困難を来す状態であった。

従って移築以来、壱百余年の歳月を経た本堂も昭和五十年代に至り、改築の必要は必須となった。幸い三柿野同行の始め、有縁の人々による芳志と信者の御協力によって、開祖親鸞聖人の誕生八〇〇年及び立教開宗七五〇年慶讃法要を機に、本堂は再建されて現在に至っている。

なお当寺のご本尊阿弥陀如来については、これまでに多難の過去があったことを寺歴は伝えている。

伝えによると此の本尊は、賀茂郡蜂屋村の某寺の元に安置されていた仏様であったが明治九戊辰（一八六八）年三月二十八日、維新政府による「神仏判然令」が発令されて以後、廃仏毀釈運動が起きた。いわゆる神は日本本来のものだと云う思想が、渡来宗教の分離を決めた神仏判然令を仏教拒否に盛り上げ、民間を巻き込んだ宗教に対する反発へとエキサイトして、毀釈運動にまで発展した狂信行為である。この為に、各地では数多くの仏像が壊され捨てられていったことは史実が語っている。

こうした狂信行為を憂いて仏像を守るために、蜂屋村某寺の住職は法衣で寺の本尊である阿弥陀如来を包むと、これを背負って密かに寺を後にした。しかし、増水した木曽川べりを逃避する途中運悪く誤って濁流に呑まれ、悲しくも阿弥陀如来（木像）と共に犠牲となられたものである。

やがて暫くして流れも治まったある日、前渡村の木曽川べりの砂中から仏像のみが発見された。幸い、これを砂中より拾い上げた心ある人の話は、竹林寺にも伝わってきた。

それを伝え聞いた当寺第五代の僭龍住職は、三柿野在の信徒と相談の上、再び此の世へ出現された尊い阿弥陀如来を、御縁が有ったものとして当竹林寺におお迎えし、御本尊として安置し現在に至っている。

なお昭和初期ころまでは、この竹林寺の東側に前渡村へ抜ける道があった。しかし飛行場が拡張され、戦時体制が推し進められると住民の郷愁を支えた生活路も、国家権力の前に取り潰されていた。

かつて昭和十年代前半頃までは、各務野を東西に抜ける中山道沿いに、青々と松の並木が心を和ましてくれたものだった。あれから僅か半世紀、今ではコンクリートに塗り固められた道に変貌し、そこには、過去ののどかさは一片もない。

縁日並びに恒例行事

＊真宗同朋会（春季・秋季）

＊永代経（春季は五月・秋季は十月）

＊宗祖親鸞聖人報恩講（十二月）

歴代住職墓碑

太子山大泉寺

■各務原市蘇原東島町二丁目八一番地
岐阜バス蘇原東島下車南へ三分　又は
岐阜バス坂井下車西へ三分
TEL・0五八三（八三）一八八八

大　泉　寺

住職　後藤睦朗（第二十三代）
宗派　浄土真宗・本願寺派
開山　釈法観法師
開基　……（創立は文明十五（一四八三）年と伝える）
本尊　阿弥陀如来
並びに諸仏　宗祖親鸞聖人・聖徳太子他。

現　場　見　取　図

歴代住職

代	住職	寂年月日
初代	釈法観	不詳
二代	釈法安	〃
三代	釈法善	〃
四代	釈教観	〃
五代	釈教善	〃
六代	釈教西	〃
七代	釈教安	〃
八代	釈覺安	〃
九代	釈覺玄	〃
十代	釈覺道	〃
十一代	釈覺安	〃
十二代	釈覺闇	〃
十三代	釈秀桂	〃
十四代	釈秀岳	〃
十五代	釈秀嵓	〃
十六代	釈秀観	〃
十七代	釈秀安	〃
十八代	釈秀應	〃
十九代	釈秀教	〃
二十代	釈秀観	〃
二十一代	釈秀顔	〃
二十二代	釈秀映	〃
二十三代	（現・後藤睦朗住職）	

寺宝

由緒

　中世の美濃では禅宗と併立して真宗が大きく発展をしてきた。当時この地方には、延暦二十四（八〇五）年に、最澄（傳教大師）が唐から帰朝して各地を回ったことにより、天台宗の寺が多く建った。

　しかし真宗の開祖親鸞聖人が、東国から上洛して尾張と美濃で布教をした文暦二乙末（一二三五）年春を境に、これまでの天台宗から真宗に転宗する寺院が増えた。

　その親鸞聖人の説く、「自ずから真の悪人と自覚することによって救われる……」という主旨によって、この地方でも多くの寺院が、親鸞の浄土真宗に転宗していった。この大泉寺もその後の一四〇〇年以後に転宗した一寺である。

　真宗への布教は親鸞の没後も続けられ、戦国の始め、親鸞から八世の蓮如上人は、殺伐とした戦乱の間を縫って祖師親鸞の宗風高揚に努め、専心布教の弘通に努力を傾けた。そして文安年間（一四四四年～一四四九年）に関東への布教の途路、祖師の旧跡の復旧に努めている。こうしたことによって、真宗は美濃一円に広まっていった。

　この大泉寺は、そうした蓮如時代の創建の寺の一つで、この地区には他に、野口の行念寺がある。なお当時天台宗から転宗した寺では光泉寺もその一寺だと云う。

　この大泉寺の創立は、文明十五癸卯（一四八三）年、足利十二代将軍・義尚の時代である。以後当住職まで二十三代を数えている。

　なお、当寺院は現住職がご入院のため、歴代住職の示寂年ほか由緒等についても詳細を欠く結果になったことをお詫びしたい。

縁日（年中行事）

＊修正会……（一月一日）
＊春季彼岸会……（三月）
＊蓮如忌法要……（四月十四日）
＊盆会法要……（八月）
＊秋季彼岸会・永代経法要……（九月）
＊報恩講「正忌法要」……（十一月二十三日～二十四日）

歴代住職墓碑

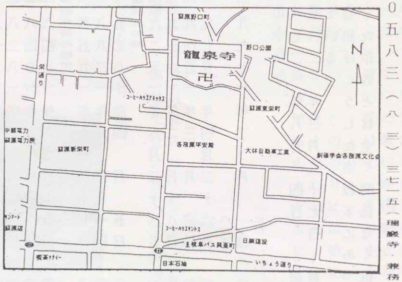
寺領内に供養

寶珠山龍泉寺

■各務原市蘇原野口町五丁目七十八番地
岐阜バス興亜町下車
北へ徒歩約五分
TEL・〇五八三（八二）三七二五（瑞巖寺・兼務住職）

龍　泉　寺

住職　無住職（北洞瑞巖寺・兼務住職）
宗派　曹洞宗
開山　天郁月堂和尚（寛政四・壬子「一七九二」年八月の寺標）
開基（開創）　本榮和尚（正徳五乙未「一七一五」八月創建の記）
本尊　聖観世音菩薩（立像丈・三十八センチ・製作者・製作年不詳）
並びに諸仏　釈迦如来・弘法大師・馬頭観世音石碑。観世音石佛。



現　場　見　取　図

歴代住職

開山　天郁月堂大和尚禅師　……示寂年不詳
二世　雪堂海仙大和尚禅師　文政元　戊寅（一八一八）年十二月五日　示寂
＊　別外自教尼首座　文政十一　戊子（一八二八）年十月九日　示寂
三世　壽山仙齢大和尚禅師　天保十一　庚子（一八四〇）年九月十日　示寂
＊　白轉俊明尼首座　弘化四　丁未（一八四七）年六月十八日　示寂
……越中の人、神應和尚の徒尼。
＊　一關祖道尼首座　安政六　己未（一八五九）年十一月十七日　示寂
四世　喜應全明尼首座　明治十五　壬午（一八八二）年八月三十一日　示寂
中興　孝岳秀全尼首座　大正九　庚申（一九二〇）年四月五日　示寂
……当庵六世・善光尼の師。
＊　悟山宗法尼首座　大正十四　乙丑（一九二五）年六月二十八日　示寂
五世　大岩法道尼首座　昭和十一　丙子（一九三六）年二月十八日　示寂
六世　心月善光尼和尚　昭和二十　乙酉（一九四五）年三月十三日　示寂
七世　玉法光雲大和尚（代務）　昭和五十　乙卯（一九七五）年四月二十六日（八二才）示寂
八世　大巌康堅大和尚（代務）　平成九　丁丑（一九九七）年二月一日（七七才）示寂

その他

・当寺に供養されている位牌の中に。

「開基」法名・釋翁玄廣居士　寛文十二　壬子（一六七二）年八月四日……寂

「開基」法名・釋宗恵　享保七　壬寅（一七二二）年三月二十七日……寂

ここには他に安積氏の位牌も供養されている。

これらは浄土真宗の位牌と思われるが、当初はこうした宗教下にあって維持されてきたものか、あるいは、そうした宗教とは全く関係なく供養されているものかは不明である……？

寺宝

＊聖観世音菩薩。

＊弘法大師像。

由緒

龍泉庵は正徳五乙未（一七一五）年八月に、野口村新田池岸畑林の三反十六歩を、金十匁で、厚見郡今泉村本覺寺の木榮和尚禅師が買い受けて、その場所に草庵を営んだのが創建だと云われている。そうしたことがきっかけで、以後は本覺寺の末寺として続いてきたが、寛政四壬子（一七九二）年の八月になって寺の維持が困難となったために、今度は真福寺村の大覺寺、海仙和尚が金三十匁で買い受けて、それを全額寺に寄進したことにより、以来は大覺寺の末寺となった。

しかし、寺は中濃新四国第三十三番霊場になってはいるが、この辺りには他に寺も多く建っていて維持管理は昔も楽ではなく、多分、難行していたと思われる。

他力本願だけでは維持は無理で、自然に無住化となり、現在は地域の人たちによって細々と見守られている状態である。現在は北洞瑞巌寺が兼務。

主な行事（年中行事）

＊地域の人が供養（毎月第三日曜日）

＊大般若（二月の第四日曜日）

＊釈迦尊生誕祭り（五月第一日曜日）

＊盆施餓鬼（八月、本堂の諸仏と境内にある石仏に供養が成されている。この供養には、北洞の瑞巌寺住職が曹洞宗の関係で任に当っている）

寺内に供養されている石佛

馬頭観音石碑

観世音菩薩石佛

―歴代住職の墓碑

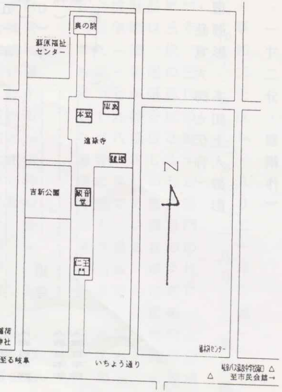
歴代の墓碑は裏手の小山、寺領地に供養されていて、地域民の保護の下にある。
なお当寺の第七世・第八世住職墓は、本寺「瑞巌寺」に供養されている。

加官山進禄寺

■各務原市蘇原吉新町二丁目二〇番地
岐阜バス蘇原中学校南口下車
西北へ徒歩五分
TEL〇五八三（八二）一七四〇八

住職　川嶋禺一郎
宗派　浄土真宗（本願寺派）
開山　禅祥首座
開基　佐々木吉兵衛親綱（法名正信）
本尊　阿弥陀如来
並びに諸仏　善光寺如来

進　禄　寺



現場見取図

歴代住職

禅祥（開山）文化四丁卯（一八〇七）年……入寂
正信（開基）文化十二乙亥（一八一五）年……入寂
貞心……（不詳）
浄専……明治十三庚辰（一八八〇）年……退寺
教順……明治二十八乙未（一八九五）年……入寂
河野行信……代務・（長塚・大願寺住職）……（入寂日不詳）
玉森了誠……大正九庚申（一九二〇）年……退寺
河野行運……代務・（長塚・大願寺住職）……（入寂日不詳）
河野博雲……代務・（長塚・大願寺住職）……（入寂日不詳）
現・川島住職（平成六年〜）

寺宝

（御免物の部）
＊阿弥陀如来立像（本尊・御丈八寸五分・慈覚大師と伝称）
＊親鸞聖人御影・聖徳太子御影・三朝高僧御影・本如上人御影

（伝来の部）
＊仏舎利（九粒）・善光寺如来像（黄金・一寸二分・親綱作）
＊仁王像（木製一対・恵心の銘あり）
＊古銭（径一寸八分・文字に可官進禄）

（石造の部）……（これらは全て開基の佐々木吉兵衛親綱の寄進のもの）
＊石燈籠（その一）・（鵜沼村在縣氏の作・安永五丙申「一七七六」年の銘）

☆奥の院・（全て犬山御石工　縣範右衛門橘陸正・寛政四壬子「一七九二」年の銘）
＊善光寺如来　＊神儒仏　＊三尊像　＊宝筐印塔

＊石燈籠（その二）

☆観音堂内…（石仏は全て寛政四辰春…？＜寛政年代に辰年は八年意外に無い＞

「二階上段」
＊（南面）大日如来

「二階中段」
＊（南面）宝生如来　＊（西面）阿弥陀如来　＊（北面）釈迦如来　＊（東面）薬師如来

「二階下段」
＊増長天王　＊廣目天王　＊多聞天王　＊持国天王

「一階」
＊観音菩薩（木製）　＊大勢至菩薩　＊聖徳太子

☆その他
＊石鳥居……（六代　縣佐右衛門、作？・享和二壬戌「一八〇二」年の銘）
＊石燈籠（その三）・（六代　縣佐右衛門、作？・享和三癸亥「一八〇三」年の銘

註……石工の縣氏は、宝暦二（一七五二）年、三代の縣半右衛門の代に、犬山藩の成瀬家御用石屋となっている。とくに三代の孫になる五代目の半右衛門陸正は世に名工と云われた石工で、その作品は、尾張をはじめ美濃各地に広範囲に渡って数多く残され、あらためて文化財的価値が評価されている。進禄寺に残る石燈籠をこの五代が亡くなったのは寛政十戊午（一七九八）年で、名工のもっとも最盛期の作であり各務原市にとっても貴重な遺産である。

由緒

往寺、各務郡に「山田寺」の末寺で、天台宗に属する「吉祥寺」があった。しかし、慶長五（一六〇〇）年の兵火により境内一帯は焼け野原と化した。

その後、約百七十年を経た明和二（一七六五）年〜明和七年に、前野村（現・那加前野町）の佐々木吉兵衛親綱（川島家祖先）により、伊吹村地内約六町四反が開拓され、「吉兵衛新田」と命名された。ちなみに、「吉新」は「吉兵衛新田」を略して呼んだものである。

明和五（一七六八）年、岐阜に大火があり多数の死者が出た。このとき、親綱も岐阜の伯父の家に居たが、家に伝わる善光寺如来像（兜守）と仏舎利を奉じて、火災の

なかを奇跡的に逃げることができた。
親綱は、この時の焼死者の供養と、五穀豊穣を祈って、新開の吉兵衛新田に仏宇の造立を計画し、安永五（一七七六）年、観音大士を安奉した観音堂が落成し、寛政四（一七九二）年には奥の院が作られた。この時に「加禄進禄」の銘が有る古銭が出土したので、加禄山進禄寺（寺号公称年不明）と命名した。
当時の幕政下では、新規に寺を作ることは厳しく制限されていたので、廃寺になっていた「吉祥寺」を再興するということで許可を得たものと思われる。親綱は、その後三〇余年の間に次々と寺院の整備に力を注ぎ、仁王門・観音堂・本堂・奥の院が一直線に並ぶ現在の姿が出来上がった。なお、同時に鎮守「稲荷神社」も親綱により建てられた。
宗派は、当時は天台宗に属したが、その後天明三（一七八三）年に、臨済宗妙心寺派に出された宗教願いが残っている。さらに慶応三（一八六七）年に西本願寺・本如上人に帰依して改宗、現在は浄土真宗本願寺派に属している。
家伝の善光寺如来像は、奥の院の石仏の台座に納められた。しかし、濃尾震災で石仏が倒れたときに盗難に遭い、その後は行方不明である。
なお四月十五日は善光寺如来のお開帳縁日として境内には屋台も並び、子供相撲や餅撒きなどもあって戦前までは大層賑わった。「おハヤシのゼンコッサマ」として、広く親しまれていた往時が偲ばれる。
本寺も濃尾震災・伊勢湾台風と二度に渡って本堂が倒壊し、貴重な資料が多数散逸しているのが惜しまれる。……なお住職墓は寺院内には無い。

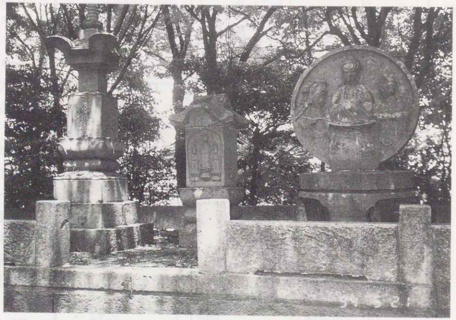
法要（年中行事）

＊四月十五日……永代経（善光寺如来像　開帳）
＊八月十七日……盆会
＊十一月末……報恩講
……その他

楼門

由諸ある楼門

往時を偲ぶ石像



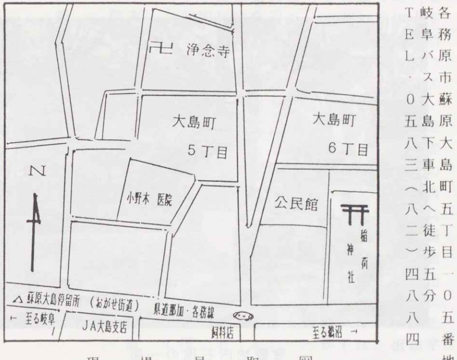
寺敷地内石像の一部

光明山浄念寺

■各務原市蘇原大島町五丁目一〇五番地
岐阜バス大島下車北へ徒歩五分
TEL 〇五八三（八二）四八八四

浄　念　寺

住職　小林賢章
宗派　真宗・大谷派
開基
開山　泰澄大師
本尊　阿弥陀如来（製作者・製作年不詳）
並びに諸仏　親鸞聖人・聖徳太子



現　場　見　取　図

歴代住職

開山　浄土真宗改宗以後，（詳しい世代は不詳）　泰澄大師（天台宗）　示寂年月日不詳
＊　浄祐法師　〃
＊　浄信法師　〃
＊　浄喜法師　〃
＊　浄圓法師　〃
＊　浄実法師　〃
＊　裕天法師　〃
＊　祐静法師　〃
第十八世　祐誓法師（火災により文書等滅失）　〃
第十九世　智眼法師　〃
第二十世　智貞法師（文化八辛未「一八一一」年三月六日，上棟式を挙げ光明山浄念寺と号し姓を小林とする）　〃
第二十一世　智山法師　〃
第二十二世　恵教法師（尾張飛保，深炒寺より入寺）　〃
第二十三世　・章法師（布教中高座上にて，寂）　〃
第二十四世　薫法師（大門・鐘楼・太鼓堂を建立）　〃
第二十五世　諦賢法師　〃
第二十六世　・・現住職

寺宝

＊別に無い。

沿革（由緒）

市の資料でも当寺については創建年月等不詳としている。ただ伝えによるとかっ

ては真言宗の寺院であったとも言われているが定かではない。しかし一般的見地からしても、創建は中世にまで遡ると思われるが、詳細については不明とされている。ただ美濃国稲葉郡史によると、当寺のルーツは大洞の願成寺にある。

時は移って養老五辛酉（七二一）年、泰澄大師が間堂を現願成寺のある地に移し、大洞山清水寺と称した。その後天平年代に入り、聖武天皇の命を受け大佛を鋳る工人を尋ねる旅に出た行基菩薩が、清水寺の霊験によって、厚見郡日野の郷に金王丸という小童を探し出して大仏が出来たいきさつにより、天平十七乙酉（七四五）年には、清水寺観音の霊験によるものとして、その祝いの為に、清水寺に対し聖武帝より「如意山願成寺」の勅號を賜っている。このとき七堂伽藍と十二坊が創建された。

その願成寺傘下の塔頭は、岩井寺（薬王寺～宮代専琳寺）・日輪寺（下之保へ）・法華寺・醍醐寺（岩滝、真願寺）・山本坊・浄念坊（大島、浄念寺）・常楽坊・専念坊（郡上白川へ）・具文寺・桜木坊・輪念坊・等々。これら寺の中に既に消滅した寺もある。

この浄念寺の元寺になる浄念坊が彼の地に創建された年は、歴史では天平十九丁亥（七四九）年だと云われている。天平文化が花開いたその頃、清水寺（願成寺）を中心に、七堂伽藍と十二坊が林立する様は、想像に絶する光景であったと思われる。

その浄念寺が大島の地に転出したのは寺伝では、承平七丁酉（九三七）年に藤原純友の賊兵が乱を起こして兵火により焼失の為、その地区に有った小林寺を吸合して各務郡の蘇原大島の荘小字市場に移転と記す。（註・藤原純友の乱は歴史書では承平六丙申「九三六」年六月とある）

その後、正和三甲寅（一三一四）年に至り、時の住職浄祐が志ざす処あって本願寺第三世宗主覚如上人に帰依、三月八日得度し他に先んじて浄土真宗に改宗。

宗派の変遷は、八〇〇年代初期の延暦二四乙酉（八〇五）年八月、遣唐船で帰国した最澄（伝教大師）が殿上に唐仏を献上した後、翌年には天台宗を開いている。そのあと東山道を下る美濃地区にも天台宗を広めて、数多くの寺を多く開いている。

いっぽう真言宗を開いた空海（弘法大師）が唐から帰国したのは、翌大同元丙戌年（八〇六年）の八月と史実は伝える。この年の三月に桓武天皇が七〇才で没すると、五月一八日には大同と改元されている。

空海が真言宗の布教に訪れたのは不詳だが、この地方で歴史の古いのは現在無住に

なっていて、他の寺院の兼務になっている須衛の「寶禅寺」ぐらいで、この寺（庵）も現在は曹洞宗傘下に属し、真言宗を系統する寺院はごく少ない状態である。

ところでこの地方で天台宗からの転宗が行われたのは、他の寺院の項でも述べたように、一二〇〇年代になっての親鸞の布教が庶民の心を捉えたことによる。

嘉禎元乙未（一二三五）年三月、浄土真宗の開祖「親鸞聖人」が関東からの帰路、三河の国柳堂（三州矢矧）に逗留され、化導を三十七日間行ったあと、葉栗郡木瀬（現在の岐南町三宅）の草庵で聞法した美濃尾張の各九門徒が中心になって、真宗繁盛の起因を築いたこととされている。

したがって当時、この地区の天台宗から浄土真宗に転宗した寺院は、禅休寺、正厳寺・法蔵寺・西入坊・安楽寺。それに蘇原地区では専琳寺・大泉寺等がある。その後一四〇〇年代に入って、浄土真宗にもやや衰微の兆候がみられるようになった。こうした状態を懸念した蓮如上人が、かって親鸞聖人の行脚された足跡を辿る形で、この地区にも追従を試みたのは歴史が物語っている。

元来、寺院は歴史の宝庫であるべき筈であった。しかし、寺院の多くは、永禄十年（一五六七年）に、織田信長が岐阜城に斎藤龍興を攻めた際の兵火の被害を受けている。古い寺院でも、歴代の詳細や寺暦が分かるのは江戸中期以後になる。

今回の太平洋戦争を始め無能な権力者による愚政愚行が、如何に人類の大切な遺産を無くしていったかを、改めて知らされた気がする。なお先の太平洋戦争では、先代の諦賢住職も兵役に就き、戦後もシベリヤに抑留されていた。氏は抑留生活によって体質も変わり、米食を胃が受け付けず、麦食とパン食で生きている…と生前申されていた。他に寺院関係者では、覺王寺住職や少林寺のご長男が南方で戦死されている。

尚、当寺は先の再建より百八十余年を経て本堂の荒廃老朽の為、門信徒各位のご尽力により、平成十年秋本堂落慶に至っている。

その他

この浄念寺も戦前には、四月八日の釈迦如来生誕祭では地域の子供たちを集めて、花祭りの行事が盛大に行われていた。釈迦の尊像に、甘茶をを掛ける行事もあった。

れんげの花で飾られた花御堂を背に乗せた張り子の象、その象の車を、大勢の子供たちが紅白の布切れで編んだ紐を引いて村の中を巡る。大人が子供の歩行に合わせて大太鼓を打つ、その太鼓のリズムに合わせて、子供たちが釈迦の歌を歌っていた。

「……むかし昔三千年……」そんな歌詞から始まる歌声が、田園地帯や村の中を進む光景は絵になっていた。そうしたのどかな風景も、戦中に入り非常事態が宣言されると見られなくなった。

寺院の仏具や梵鐘が、戦争遂行の名目で供出させられる。この浄念寺の梵鐘も、供出された後は暫く石製の釣り鐘が吊られていたが、その後現在の梵鐘に替わり、当時を知る人も少なくなった。

昭和十七（一九四二）年、大日本翼賛壮年団が結成されると、稲葉郡下の代表者たちが当寺の本堂を拠点にして、一週間の研修を実施した。当時地域に残っていて、郡下から集まった四〇才前後の男たち。大東亜戦争を勝ち抜くための、国の指導方針に従った行事には、広い寺の本堂は利用されることが多かった。

このあと村の常会や、小学生たちの常会が月に一回本堂で行われるようになった。戦争末期になると、浄念寺には九州出身の陸軍少尉が、三十人程（一個小隊）の兵隊で常駐した。高射砲隊の兵隊で、高射機関砲を備え、寺内に炊事設備を持っていた。

兵隊用トイレは寺門の道路に沿って、汲取り式の簡易便所が設置され、常時石灰が撤かれていたのは消毒の主旨もあったのだろう。この頃、諦賢住職は兵役に就かれていたように思う。終戦間近の昭和二十年七月二十日は曇天で金曜日、午前十一時前後ノースアメリカンとP五十一の戦闘機が約百機、名古屋・豊橋・浜松・岡崎を銃撃した際、ノースアメリカン戦闘機の一部八機内外が、高空より各務原の軍事施設を銃撃したことがあった。

この時浄念寺に在駐していた兵隊が、寺の敷地の隅から撃つ高射機関砲が空に向かって吹えた。当時の筆者の日記には、飛燕を改造した空冷式の陸軍の戦闘機「一〇二型」が郷土の空を征空中を、血迷える友軍の對空機関砲陣が友軍機を撃つ…。低空を飛行しながらの翼を振り合図せるも無駄なり。曇天の為、翼の日の丸を認識困難とは云え、耻ずかしき事なり情け無し。此の為味方の少数機が、稲葉郡内に不時着す…。

寺院に駐留した兵隊は四十過ぎの應召兵が中心だった。一〇二型は空冷式で米軍機のノースアメリカンは水冷式、我々にも明らかに識別できた。兵隊は戦後も暫く寺に居たようでこの時代、暗い嫌な思いを何処の寺も経験していた。

縁日（年中行事等）

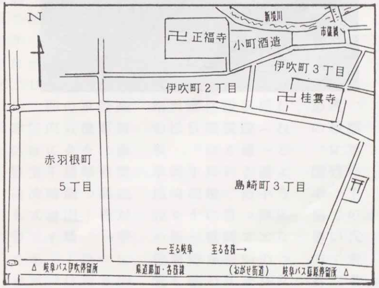
＊報恩講（一月）

歴代住職墓碑

伊吹山正福禅寺

正　福　禅　寺

■各務原市蘇原伊吹町二丁目二十一番地
岐阜バス蘇原下車北へ徒歩十五分
無住・「桂雲寺の北方」（連絡先・芥見・眞聖寺・TEL〇五八・二四三・一八三五）



現　場　見　取　図

住職　無住職・（岐阜市芥見，眞聖寺後見）
宗派　黄檗宗
開山（勧請）東州衍（エン）賢禅師（寛延四年七月二十四日，遷化）
開基　北宗如龍禅師・（註・鵜沼村林佐之右衛門，小伊木村佐森長三郎が奔走の記録あり）
本尊　聖観世音菩薩（盗難紛失のため・製作年・製作者不詳なるが，新本尊は，眞聖寺にて保管供養）
並びに諸佛　弘法大師・地蔵菩薩

＊当寺は現在無住職のままで、もっか廃寺の状態を呈しているが、芥見眞聖寺住職兼務という形で、いずれ新堂建立を計画、住職の御兄弟の一人が黄檗の灯を継ぐべく信徒総代の金武和彦氏他が管理。寺院の中の仏具などを真聖寺に保管されている状況である。

正福寺の歴代住職については、無住の期間も多く、寺領地の裏手に供養されている墓石碑その他からの抽出により、概ねの住職名を記す。

尚、大正三（一九一四）年十月に、当寺の山田俊道住職から黄檗宗管長に提出された寺院資料も参考にして、歴代住職名及び在住の尼僧についても記載する。当寺の裏手には尼僧の墓碑もあり、当寺院の歴代住職の順序については、その歿年順に記した。（山田俊道住職の提出記録は総代の金武氏保管）

この調査に当っては、総代の金武和彦氏及び門徒、真聖寺住持のご協力があって編集ができたことを感謝する。無住寺の資料とはいえ地域の歴史的資料であり、残せたことは幸いであった。　―編集者―

＊歴代住職・他

開山・東州衍賢大和尚禅師……寛延四辛未（一七五一）年七月二十四日（墓碑は本寺に存在しない…）……寂
（註・寛延四年は十月廿七日に寶暦と改元。寛延が正解）
＊玉嶺祖主座禅師……寶暦六丙子（一七五六）年十一月……寂
＊法蒲院覺花智光禅尼……安永四乙未（一七七五）年十月十五日……寂
一世・北宗如龍大和尚禅師……安永七戊戌（一七七八）年二月十日…墓碑に五五才とある……寂
二世・天桂真枝和尚禅師……（寺明細簿に継いだという記名あり）（師の東州禅師に敬意して墓碑は二世だが実質は一世…か…）……示寂年不詳
三世・鐵舩高和尚禅師……寛政十二庚申（一八〇〇）年四月六日……寂
＊真智上座……文化四丁卯（一八〇七）年四月一日……寂
四世・大圓通鏡和尚禅師……文政十一戊子（一八二八）年四月十七日……寂
中興・祖宗孝道尼首座……明治二十七甲午（一八九四）年三月二日……寂
＊……・正眼智開上座……大正十辛酉（一九二一）年一月二日……寂
五世・山田俊道瑞大和尚……昭和十五庚辰（一九四〇）年十二月二十三日……寂
＊西本紹堂師……（墓碑無し）……昭和五五庚申（一九八〇）年五月六日……寂
＊井川旭光師……（墓碑無し）……昭和六一丙寅（一九八一）年九月……（正規の僧か不詳）……没
他に・＊微咲院観月智仙大姉……明和六乙丑（一七六九）年五月十五日……（墓碑あり）……寂

＊寺宝……無し。

由緒

黄檗宗は禅宗の一派で、元来は臨済宗であった。宗祖隠元禅師は、中国の福建省福州府の福清で明の時代の萬暦廿年（一五九二年）に生まれている。（以下詳細は寶蔵寺の項に記載）禅師は臨済正宗第三十二世を名乗り、明末の頃、承應三甲午（一六五四）年七月に六二才で渡来して、長崎の興福寺・崇福寺で住持。寛文元辛丑（一六六一）年、京都の宇治に黄檗山萬福寺が開創されるや開山祖となる。以後徳川幕府の庇護を受けて多くの弟子を育し、門下の弟子は全国に末寺を開創。当時は約千五百の末寺を有したと云われている。明治維新後には臨済宗黄檗派（萬福寺派）から黄檗宗に名称を換え、現在は全国に約五〇〇ケ寺の末寺を有している。

この岐阜県には約三十ケ寺が存在している。内訳は岐阜市芥見の眞聖寺・清水寺。同じく大仏町の篭大仏として親しまれている正法寺。関市の小松寺・それに臨川寺。瑞浪市の明白寺。恵那市の東禅寺。高山市の恩林寺。そして此の各務原市では東島町の寶蔵寺・熊田町の平蔵寺（無住、美濃加茂市・大寧寺住職兼務）それに、各務山の前町の清見寺と当、正福寺がある。

伊吹山正福寺についての詳細は定かでないが、寺伝の由緒では、古い年中に徳崇と云う僧が居て堂宇を建てた。しかし無本寺のため近くの臨済宗「陽徳寺」の末寺としたとある。だが、寶暦八年（一七五一）頃、その僧が死去したため無住となり、堂宇は荒廃に任せること約十年を経る。

こうした状況を見て、明和四丁亥（一七六七）年四月、鵜沼村の林佐之右衛門・小伊木村の佐森長三郎の二人が尾州犬山の先聖寺前住職であった北宗禅師に帰依し、一寺建立の思し召しを受けて奔走すること数ケ月。大破している当寺の再興を期して本寺である陽徳寺に末寺を離れる由を交渉、これを永々譲り請け、堂宇を新築したと記録している。

当寺の再創建年代は定かではないが、残されている書類では、その年の拾月中旬に至って犬山城下の神護山先聖寺第五代の住持であった臨済正宗第三十七世の東州衍（エン）賢禅師を請して開山としたとある。一方、大正三年に黄檗宗管長に提出された文書では、北宗禅師は本師の東州衍（エン）賢禅師を勧請しその隠居寺として入寺開山したことになっている。東州禅師は、寛延四（一七五一）年七月二十四日に五十一才で遷化。

開山の東州禅師の墓石碑が寺領地に無いことから、この提出書類には「禅師後に臨川寺に住し、第十代の法席を継ぎ徒弟をして、当山（正福寺）に住せしむ」とあり、関市の臨川寺に墓石碑があるのか……。

沿革では、

開祖北宗禅師は本師東州禅師を勧請して開山とし、自らは第二代の席を継ぎ、その後を墓石碑は無いが天柱和尚・鐵舩和尚・大圓鏡和尚と相継ぎ住持たり。爾来法席継承其人を得ず、臨川寺住職が常に兼務し看坊を

置くと記す。寺領地内には鐵舩和尚と、大圓鏡和尚の墓碑は供養されている。

なお文書に示す開祖の北宗禅師は、自分の師である東州衍賢禅師を勧請して開山とし、自ら正福寺の第二世の席を継いだとしているが、これは師の東州禅師を立てたもので、実際は第一世であったと推察する。

※東州衍（エン）賢禅師は羽州（現在の秋田県・山形県）の人。犬山の先聖寺第五代住職の時、正福寺の開山・寛延四年（一七五一）七月二十四日に遷化。法寿五十一才。

※神護山先聖寺（犬山）の末寺

- 秋田県横手市……旭岡山三井寺。
- 岐阜県各務原市……伊吹山正福寺。
- 〃　関市下迫間……寶宮山正渓寺。
- 愛知県犬山市……三寶庵。

寺はその後数十年を経て当山中興の孝道禅尼首座（墓石碑あり、明治二十七「一八九四」年寂）に至る。時に明治二十四年十月二十八日朝の濃尾大震災に際し、堂宇全壊。孝道禅尼はすぐ堂宇再建に尽し、その復旧に力を尽くす。このため、明治二十七年の二月に現在の堂宇の俊工を見る。

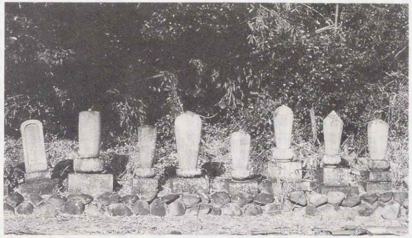
記述には、この年の三月、孝道禅尼は病を得て示寂と記す。堂宇完成後二ケ月目のことである。記述は、なお続いてその後、当山に尽くしたる功や偉大なりと結ぶ。明治四十三年十一月三十日、山田俊道氏が住職の任に就いた時の記である。現在無住のため廃墟化の堂宇は、この時建てられたものである。本堂の中からこれを証明する棟上げを記入した板が出ている。

この正福寺は、二百五十年ほどの歴史を経ているが、現在も含めて過去にもしばしば無住職の期間があった。小寺の宿命として、運命とは言え寂しいが、昭和十五庚辰（一九四〇）年俊道和尚が寂後、急遽入寺の西本紹堂氏が後を継いだ。しかし昭和五十五年五月六日、西本氏遷化。美濃市から入寺の井川旭光の時代になると寺は寂れ、その井川氏（正式な僧籍は不詳）が昭和六一（一九八六）年に没すると、単なる留守居気分の彼の息子は寺を守ると云った意識は無く、不良交友、半ば暴力団化の類のたまり場と利用。したい放題で信徒たちも危険で侭ならない状態を呈し、気が付くと荒れた廃墟の寺と化していた。

幸い信徒代表他の人々の懸念もあり、眞聖寺住職の協力で仏具等の散逸を防ぐ処置が成された。しかし、時既に遅く、不良者の行為により本尊の観世音菩薩及び寺宝等は既に盗み出されていた。眞聖寺では再建に備えて、別に本尊も用意され保管されている次第である。

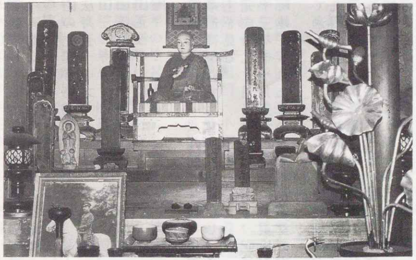
＊年中行事（以上の理由により現時点では無い）

＊歴代住職の墓碑



当寺裏地に供養

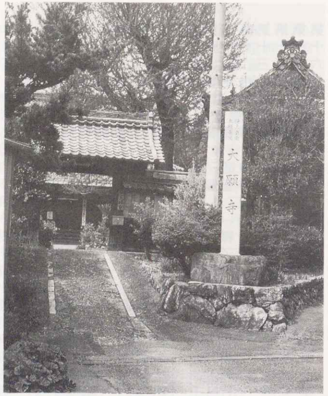
仏像仏具位牌等



現在は眞聖寺で保管

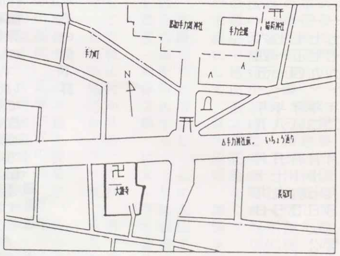
実静山大願寺

■各務原市那加長塚町一丁目一二七番地
岐阜バス手力雄神社前下車南入り徒歩三分
ＴＥＬ・０五八三（八二）一六六八



大願寺

住職　井上英樹（代務住職）
宗派　浄土真宗（本願寺派）
開山　浄誓和尚（慶長年間）
開基　…………
本尊　阿弥陀如来
並に諸佛　三朝高僧・顕如上人・聖徳太子・他



現場見取図

歴代住職

※大願寺についても他の那加地区内の寺院と同様に、各務原市の記録として列記すべきであったが、前住職の「たとえ各務原市であろうと一切係わり不要…」との為、先の那加地区寺院簿には不記載の止む無きに至った。……しかし、以後…平成十年度に至り、代務住職の出された蓮如上人五百回遠忌法要記念の冊子に基ずき、せっかく歴史のある寺院であるため歴代住職等について改めて記述する。

（編集者・小野木）

歴代住職

第一世 釈正慶……寂年その他不詳
第二世 釈圓智……〃
第三世 釈圓信……〃
第四世 釈慶誓……〃
第五世 釈空誓……〃
第六世 釈慶順……〃
第七世 釈順智……〃
第八世 釈順正……〃
第九世 釈順諦……〃
第十世 釈了誓……〃
第十一世 釈圓誓（釈了源・圓誓舎弟非代）……〃
第十二世（中興） 釈浄誓 出生年月日不詳……明暦元 乙未（一六四五）年五月十九日……寂
第十三世 釈證誓 出生年月日不詳……正徳元 辛卯（一七一一）年八月十九日……寂
第十四世 釈順誓 出生年月日不詳……宝暦四 甲戌（一七五四）年八月十九日……寂
第十五世 釈恭順 元禄十三庚辰（一七〇〇）年出生……安永八 己亥（一七七九）年二月十七日（八〇才）……寂
第十六世 釈仰順 享保二〇乙卯（一七三五）年出生……安永八 己亥（一七七九）年二月九日（四五才）……寂
第十七世 釈随應 明和八 辛卯（一七七一）年出生……嘉永二 己酉（一八四九）年十月二十七日（七九才）……寂
（非代） 釈興愍 寛政元 己酉（一七八九）年出生……弘化二 乙巳（一八四五）年七月二十七日（五七才）……寂
第十八世 釈浄順 寛政十 戊午（一七九八）年出生……弘化二 乙巳（一八四五）年四月十三日（四八才）……寂
第十九世 釈敬順 天保九 戊戌（一八三八）年九月十七日出生……明治二十八 乙未（一八九五）年六月一日（五八才）……寂
第二十世 釈行信 慶応三 丁卯（一八六七）年十一月十八日出生……大正四 乙卯（一九一五）年五月二十六日（四九才）……寂

第二十一世 釈行運 明治三〇丁酉（一八九七）年八月八日出生……昭和三三戊戌（一九五八）年九月七日（六二才）……寂
第二十二世 釈博雲 大正十五丙寅（一九二六）年十月十五日出生……平成八 丙子（一九九六）年八月二十八日（七一才）……寂

由緒

當山由緒によると、創立移転について天福元年、癸巳の年（四条天皇の時代）に尾張の国葉栗郡の村久野の庄、飛保の郷に創立。その後慶長三戊戌の年に年中事緑によって本国を退き、現住地に移転した。尚、當寺は往古天台宗の一寺であったが創立開祖不審、天福元年の頃祖先正慶、三州矢作の宿柳堂に於て高祖親鸞聖人に謁し、聞法歓喜して弟子となる。（註・他の資料では、嘉禎元乙未「一二三五」年に関東から帰路の親鸞が此の年三月、三州矢矧の柳堂で化導したとある。寺伝の天福元年とは二年の開きあり…？）この時親鸞の弟子となった正慶の俗称は、伝えによると後鳥羽帝の寵臣で宮田李之介正慶なり。正慶は藤原鎌足七代の後胤、眞夏卿之末子で従五位下遠江守十三代の末裔にして、建久の頃、無情を感じて出家し、正慶法師と號す。

叡山余河（横川）に住し、源信僧都真筆の画像阿弥陀如来を得て、有縁なりと信仰し一心に念仏す。後、承久の乱に後鳥羽上皇が隠岐の国に遷幸のことを拝聞し、正慶はその御配所に至る。上皇は叡感浅からず、この時御製の和歌、宸筆の色紙等を賜う。それより諸国を遍歴し當国（飛保之郷）に来たりて當寺に住す。

その後、三州安城城主の安藤権守（法名・圓善）の子供を養子として寺職に付かせる。これ、第二世の圓智なり。そうした縁りもあって、順徳帝に仕えた北面の武士安藤権守（安城の城主か…？）は、承久の乱のあと當所に住し、正慶の為に檀越（開基）として草堂を起立す。

正慶は此の草堂に絵像の阿弥陀如来を本尊として、傍らには伝来の聖徳太子の木造を安置す。今の上宮寺はこれである。この絵像の阿弥陀如来は、現在「大泉寺にあり」、その子細は、正慶六代の孫、乗珎（じょうちん）の末子、乗秀が此の本尊を供奉して美濃の国各務郡蘇原之庄に一宇を起立す。今の大泉寺が是れなり。

その後慶長年中（一五九六〜一六一五年間）に至り、尾州は国守の命により真宗本願寺末は、東本願寺に転属す。

よって正慶十二代の孫「浄誓」（一六四五年四月寂）は従来の規礎を離れず、本国を退去し、寺を現住地に移転す。當寺の旧住所地の尾州葉栗郡村久野之庄飛保之郷はこれなり。當寺を尾州よりの通寺として、大願寺と云う。本寺は旧住所地に於て尾州六坊の一つなり。即ち、當寺並びに上宮寺・勝林寺・報土寺・西正坊・西方寺を云う。

かっては、上宮寺を東ノ坊といい、當寺（大願寺）を西ノ坊と称したり。

近古には當寺を中本山と称し、郡上郡初音村の安楽寺、同郡石原村の明願寺の二末寺を有していたが、明治十一年（一八七八）頃に離末す。

寺宝等

＊「和朝親鸞聖人御影」　裏書き（釋准如・花押）慶長六年辛丑（一六〇一）霜月十五日書。
　尾州葉栗郡村久野庄飛保

＊「方便法身尊像」　裏書き（大谷本願寺釋実如・花押）永正十五年戊寅（一五一八）四月一日
　川野門徒大願寺尾州葉栗郡・方便法身尊像・飛保郷惣道場物也

＊「顕如上人真影」　裏書き（大谷本願寺釋教如・花押）文禄二年癸巳（一五九三）五月十六日
　尾州葉栗郡村久野庄飛保郷　大願寺常住物也・願主釋浄誓

縁日等

取材不能につき、詳細は不記載……

歴代住職碑

前記理由により調査不能、不記載……

……以上

あとがき

各務原市内寺院簿（その四）の発刊は、一つの報告書ができたということだけではなく、市内寺院全部の名簿が完成したことであり、各務原市歴史サークル活動の大きな成果の一つであります。今後は、各務原市の歴史解明の貴重な資料として利用されて行くことでありましょう。

十年間にわたる調査・編集作業は、会員の方々の努力と歴史解明というあつい情熱によって支えられ、このような大きな成果となりました。

長年に渡る調査編集期間や調査者の思いなどで統一的な編集がなされていない部分も有りますが、編集者の意志を尊重し原文を重視して刊行致しました。

これからも、すばらしい活動を続けられることを期待すると共に、微力ではございますが、今後ともこうした活動を支援して行きたいと考えております。

発刊に当たり、調査・編集に携われた会員の方々や、ご協力してくださった寺院関係者の皆様方にあつくお礼申し上げます。

平成十一年三月

各務原市歴史民俗資料館
館長　小川和正

各務原市の寺院（その四）
かかみがはらし　じいん

平成十一年三月

編集　各務原市歴史サークル
発行　各務原市歴史民俗資料館

各務原市図書館
1148884620